

烏帽子会会報

2020年春号 Vol.68



白衣授与Student Doctor認定式 集合写真

■ 第39回烏帽子会総会 中止	3 P
■ 学長 就任 挨拶	4 P
■ 医学部長 就任 挨拶	5 P
■ 病院長 就任 挨拶	6 P
■ 教授 就任 挨拶	10 P
■ 教授 退任 挨拶	16 P

福岡大学医学部同窓会

目 次

・ 総会案内			
第 39 回烏帽子会総会 中止		3
・ 会長挨拶			
43 年の凌駕	高 木 忠 博	3
・ 学長就任挨拶			
学長就任挨拶	朔 啓二郎	4
・ 医学部長就任挨拶			
福岡大学医学部長就任挨拶	小 玉 正 太	5
・ 病院長就任挨拶			
福岡大学病院の現状と歴代の執行部紹介	岩 崎 昭 憲	6
福岡大学筑紫病院長就任のご挨拶	柴 田 陽 三	8
福岡大学西新病院長就任挨拶	三 浦 伸一郎	9
・ 教授就任挨拶			
教授就任のご挨拶	升 谷 耕 介	10
教授就任のご挨拶	羽 賀 宣 博	11
教授就任のご挨拶	藤 田 孝 之	12
教授就任のご挨拶	二 村 聡	13
教授就任のご挨拶	河 村 彰	14
教授就任のご挨拶	石 井 寛	15
・ 教授退任挨拶			
教授退任のあいさつ「学生・患者を想って過ごした 22 年半」	田 村 和 夫	16
福岡大学医学部に期待すること ―教授退任にあたって―	西 村 良 二	17
プロフェッショナルを目指すということ	中 島 衡 利	18
福岡大学病院で経験した腹腔鏡手術とロボット手術の思い出	田 中 正 隆	19
退職後に思うこと	井 上 隆 司	20
福岡大学への感謝と期待	出 石 宗 仁	21
10 年間お世話になりました	永 田 忍 彦	22
・ 学会開催報告			
第 10 回日本炎症性腸疾患学会学術集会 ―開催報告	二 見 喜太郎	23
第 16 回日本整形靴技術協会学術大会の開催報告	竹 内 一 馬	24
・ 在外研修報告			
Harvard Medical School/Massachusetts General Hospital における 海外留学を終えて	仲 村 佳 彦	26
・ 支部だより			
大分県支部会（かぼす会）便り	鬼 木 寛 二	27
・ 学生会員支援報告			
M4 Student Dr. 認証・白衣授与式	安 元 佐 和	29
第 114 医師国家試験結果総括と学位授与の報告	安 元 佐 和	30
・ キャンパス便り			
第 108 回日本病理学会総会 優秀演題賞	濱 田 利 尚	31
・ 訃 報			
権 教次先生を偲んで	池 田 稔	32
福岡大学筑紫病院外科 名誉教授 有馬純孝先生を偲んで	二 見 喜太郎	34
森本健司君を悼む	松 本 信一郎	36
・ 医局長・医長名簿		37
・ 教育職員人事		38
・ 事務局より		39
・ 編集後記		39

同窓会ホームページ共通 ID、パスワード

ID : eboshikai
パスワード : fukudai1 (数字)



ホームページ用二次元
バーコード

第 39 回烏帽子会総会 中止

この度令和 2 年 7 月 4 日に開催予定しておりました『福岡大学医学部同窓会 烏帽子会総会・講演会・懇親会』につきましては、現在発生している新型コロナウイルス (COVID-19) 感染症が拡大している状況を受け理事会内で協議の結果、総会・講演会・懇親会 の開催中止を決定いたしました。

各地より多くの参加者が見込めること 全員が

医療関係者であることから、健康面・安全面を最優先すべきであると判断し、中止することになりました。開催を楽しみにして下さった皆様には、ご迷惑をおかけしますが、ご理解をいただきますようお願い申し上げます。

尚、来年度に 24 回生と合同で開催予定にしております。日程が確定次第、改めて告知をさせていただきます。

総会担当幹事 23 回生

上田 秀一・合馬 慎二・深水 康吉

会長挨拶

43 年の凌駕

烏帽子会 会長 高 木 忠 博 (1 回生 脳神経外科クリニック高木 院長)



コロナパンデミックショックで、日本に大きな変化が生まれて来るような雰囲気があります。創設 85 年の福岡大学歴史上、母校を率いる「学長」に、福大卒業生である朔啓二郎君が、圧倒的多数で初めて選任されました。而も福大で最も歴史の浅い医学部からの選出でした。1972 年に医学部が創設され、140 人の一回生が入学しました。当時の教授年齢は、ほとんど 40 歳代の新進気鋭の先生達で、年配の先生は、今井先生(病理)、樋口先

生(皮膚科)のお二人位でした。教育は大変厳しく、全受講教科で一教科でも再試を落とせば即留年決定でした。然るに最終卒業生は 63 人になりました。その中で大学人の道を進み 6 人の教授が誕生しました。その一人が朔君です。学長への着任まで大学卒業後僅か 43 年で母校出身者が達成できた歴史は、全国大学の歴史でも非常に希少な出来事だと思います。而も学部創設から僅か 49 年での輩出したのは大変驚異的な事ではないでしょうか。朔君は 1978 年卒業、2000 年教授就任、2013 年医学部長就任、2015 年再選、2017 年再選(3 期経験者、西園、松岡、朔 3 人のみ)、2020 年学長就任しました。我々は医学部の先人達を 43 年で凌駕した記念すべき年を迎え、我々の力で我々の大学を作るスタートを今年切ったと言えるのではないのでしょうか。これからは「So, What?」「デ、どうする?」に答えて行かねばならないと思いました。

学長就任挨拶

学長就任挨拶

福岡大学長 朔 啓二郎 (1 回生)



令和元年12月1日、第9代福岡大学長に就任しました。医学部・病院のみならず、創立85周年にして、福岡大学卒業生が初めて本学の学長になりました。多くの方から祝福され、温かい言葉をいただきました。心から感謝申し上げます。

卒業生27万人超を擁する福岡大学は、西日本屈指の私立大学として、発展し続けています。教育、研究、医療における本学のポテンシャルは高く評価されてきましたが、ここに来て、なお一層のステップアップが必要です。物事は短期的、中長期的計画と実行・評価・改善が必要です。学長選挙の所信にも書きましたが、信頼される執行部体制を構築します。また、大学の将来は正しい方向、公正かつ公平な立場を遵守することを旨とします。大学を取り巻く社会状況は、少子高齢化、情報化・AI

社会、国際化、財政危機、医師の地域偏在、専門医制度、大学人の働き方改革、建物の安全性など、多くの案件が渦巻いていますが、ハードではなくハートで、そして、リスクマネジメントと監査視野を大切に、ソフトランディングできるように模索します。これからのリーダーシップの在り方が福岡大学の将来を決めていくと考えますが、私はサーバントリーダーシップ、気が付いたら全体がレベルアップしていたように持ち上げていきたいと存じます。多様化する社会に、良心、理性、自由意志の3本柱を大切にしていく所存です。次のステップとしてのSociety5.0社会は、大学人の知と若き人材をフルに活用し、実現されていきます。やはり、教育と研究の活性化しか大学は生き残る術がないのです。

私たちの世界は万事、定められた時があるそうです。いい言葉ですが、大学改革を推進すべき時に新執行部、大学役員を組織できたことを感謝し、たえず前進の姿勢で臨みます。大学運営は、ラグビーやボクシングの試合と違います。弱いから負けるのではありません。逆に、強いから勝つものではありません。変化に対応できるものが生き残るのです。教育と研究の大学を張って、27万人の卒業生とともに、強者の余裕で勝ち抜きたいと考えます。どうぞ皆様、ご支援とご協力をお願いします。

学長室：機能的にモデルチェンジしています。



医学部長就任挨拶

福岡大学医学部長就任挨拶

福岡大学医学部 再生・移植医学 教授 小玉 正太 (13 回生)



「我々世代の医学部卒業教育は、秩序だったカリキュラムもなく、卒直後入局した教室の人事に沿い、臨床研修先や派遣先の出張病院に赴任した。我々に主体性が無かった訳ではなく、すべからず決定した人事に沿い研修先や赴任先で、最善を尽くす習慣が自然と身につけていたのである。時として、教室から打ち切り寸前の赴任先で腐ることなく、これでも教室の看板を背負い赴任していると、自分を言い聞かせ、たった一人残った赴任先の医局で臨床例を吟味し論文執筆を行うなど、その後の人生を左右する精神力を養ったものである。」

これは烏帽子会会報 2010 年春号で奇しくも 10 年前に同窓会事務局から寄稿を頼まれ掲載された文頭の文面である（卒後 20 年を振り返って - 再生・移植研究の 10 年を中心に - から）。卒後 4 年目であったが、今の働き方改革など想像もせず、全てが自己研鑽であった当時、少ない医師で出向先に特攻赴任した。手術が夜遅くまで終わらなかった後も、ベッドに正座し愁訴があるのに回診を待っていた患者さんを今でも思い出すことがある。19 時か 20 時には当時の主任教授から、そこは出向として打ち切った方が良いかと、数日おきに電話が掛かってきた。この様な環境であっても、一人医局の薄暗い電灯にスタンドの明かりを加えて、臨床論文の執筆を行っていた。夏は蛙の合唱

がうるさく、ビール一杯でも飲みたくなかったが、本気で集中すれば雑音も消えていたことを記憶する。この出向先で不屈の精神力を養うことができた。以後どのような職場環境にあらうと目指す生き方にブレたことがなかったつもりである。

理念やそれに沿った生き方は不変のものであり、立てた志は変わりことなく貫徹すべきであろう。色々な環境にいる若い医師や後輩は是非参考にして貰えればありがたい。

最後に強力なコンプライアンスと、信賞必罰を持って基準線の変わらない采配で、学部長として案件に対応したいと考えているが、お気付きの点があれば諸先輩方からご指導ご鞭撻賜れば幸いです。



中止された卒業式にかわり、医学部 B 会議室にて学位記を授与しました

病院長就任挨拶

福岡大学病院の現状と歴代の執行部紹介

福岡大学医学部 呼吸器・乳腺内分泌・小児外科学 教授 岩崎 昭 憲 (5 回生)



昨年末の12月1日に福岡大学病院の病院長に就任致しました。1982年に福岡大学を卒業し旧第二外科に入局し、当時の気楽な研修医から37年目の大役になります。当時の院

長は、3代目にあたる朝長先生だったと記憶しています。私は13代目になります。ちょうどよい機会だと思いますので、院長、副院長、看護部長、事務長などの歴代の方々の一覧を示しました(表)。懐かしい先生方の記憶がよみがえってくる方も多いのではないのでしょうか。

さて医療を取り巻く環境は急速に変化しており、大学病院といえども決して安泰ではなくなっています。

【教育環境】ほとんどの研修医がどこかの医局に入局し、修練を始めるため大学病院を選択することが当たり前ではなくなりました。私たちの初期研修医時代の給与は5万円でしたが、現在は20万円超になっています。恵まれているように見えますが、市中の研修病院はその二倍以上で、しかも住宅費補助も支給されるとも聞いております。勿論収入だけでの問題だけではなく研修の質も重要だと思いますが、市中病院も魅力あるプログラムを掲げて健闘しています。すなわち大学病院の魅力が低下しているわけです。学位への考え方も大きく変わっており、大学院での研究生活を送るより専門医習得を重視する傾向にあります。したがって多くの症例の指導を身近で経験できる病院が、良い病院として人気があります。その点、特定機能病院である大学病院は、不利になります。このような背景から、初期研修医のマッチ率が年々低下し定員割れ傾向にあることも心配です。定員枠決定の権限も国から県へ移行されました。過去3年の実績で割り当てが決まりますから、減らされ続けて初

期研修医の姿が、大学から消えていく時代が将来くるかもしれません。福岡大学病院の魅力を発信する取り組みを強化しなければなりません。

【病院運営】ご存じのように、高度医療を提供するために定期的な高額医用機器の買い替えや、多くの医療スタッフを必要としますので、つねに経常収支は厳しい環境にあります。「働き方改革」や「同一労働・同一賃金」により、さらに人件費負担が増えていきます。診療科の偏在も大学病院にとっては見過ごせない案件です。小児科、産科を希望する医師や外科系、救急に携わる医師の減少に歯止めがかかりません。市中病院は、ますます深刻化していますのでセンター化が加速していくものと思います。厳しい労働環境の診療領域は大学病院に依存する傾向は、さらに大きくなります。しかし人員確保の課題や「働き方改革」が障壁になっています。

【未来志向】12月1日より、朔先生が学長に就任され、医学部長に小玉先生が就任しています。福岡大学病院の医師の人事は、医学部教授会での承認後に本学で学長の最終決済が必要です。また医療安全や予算に関するあらゆる重要案件も、最終的には学長と理事会での承認を得ないと実施されません。今までより大学や医学部と風通しが良くなったことで迅速な病院運営ができるようになっていきます。様々な課題もありますが、私の役割は未来志向でなくてはなりません。現状の課題をひとつひとつ分析し、それを克服しながら「素晴らしい病院」を後輩方に残していくのだと考えています。

追記：現在、病院では新型コロナ(COVID-19)対策に追われ、今後の推移が心配な状況です。福岡県も7つの緊急事態宣言地区に指定されております。人類の歴史は感染症との戦いでもあります。最近では2002年からの重症急性呼吸器症候群(SARSコロナウイルス)、2012年に中東呼吸器症候群(MERSコロナウイルス)がアウトブレイクしたのは記

憶に新しいところです。COVID-19は、かつて経験したことの無い社会生活へ影響を及ぼしています。これらを教訓として今後の医療体制を考えていく契機

にしたいと思えます。皆様におかれましては、感染対策の基本である手指消毒や手洗いなど怠りませんようくれぐれもご注意ください。

《歴代の病院長、副病院長、事務長、看護部長》

■ 歴代の病院長 ■

氏名	期間
樋口 謙太郎	昭和48. 8. 1～昭和50.12.15
曾田 豊二	昭和50.12.16～昭和54.12.15
朝長 正道	昭和54.12.16～昭和60.11.30
志村 秀彦	昭和60.12. 1～平成 1.11.30
菊池 昌弘	平成 1.12. 1～平成 9.11. 3
有吉 朝美	平成 9.12. 1～平成13.11.30
白日 高歩	平成13.12. 1～平成17.11.30
瓦林 達比古	平成17.12. 1～平成19.11.30
内藤 正俊	平成19.12. 1～平成23.11.30
山下 裕一	平成23.12. 1～平成25.11.30
田村 和夫	平成25.12. 1～平成27.11.30
井上 亨	平成27.12. 1～令和 1.11.30
岩嶋 昭憲	令和 1.12. 1～現在

■ 歴代の副病院長 ■

氏名	期間
朝長 正道	昭和50.12.16～昭和54.12.15
奥村 恂	昭和54.12.16～昭和60. 5.31
荒川 規矩男	昭和61. 6. 1～平成 1.11.30
浅尾 學	平成 1.12. 1～平成 3.11.30
坂本 公孝	平成 3. 2. 1～平成 5.11.30
大島 健司	平成 5.12. 1～平成 9.11.30
満留 昭久	平成 9.12. 1～平成13.11.30
田村 和夫	平成13.12. 1～平成17.11.30
小野 順子	平成15.12. 1～平成17.11.30
斉藤 喬雄	平成17.12. 1～平成19.11.31
朔 啓二郎	平成17.12. 1～平成19.11.31
山下 裕一	平成19.12. 1～平成21.11.30
向坂 彰太郎	平成19.12. 1～平成23.11.30
大慈弥 裕之	平成21.12. 1～平成23.11.30
比嘉 和夫	平成19.12. 1～平成23.11.30
井上 亨	平成23.12. 1～平成25.11.30
田中 正利	平成23.12. 1～平成25.11.30
渡辺 憲太郎	平成23.12. 1～平成25.11.30
大慈弥 裕之	平成25.12. 1～平成27.11.30
中川 尚志	平成25.12. 1～平成27.11.30
中島 衡	平成25.12. 1～平成27.11.30
石倉 宏恭	平成27.12. 1～平成29.11.30
坪井 義夫	平成27.12. 1～令和 1.11.30
吉満 研吾	平成27.12. 1～令和 1.11.30
宮本 新吾	平成29.12. 1～令和 1.11.30
中川 朋子	平成25.12. 1～令和 1.11.30

■ 歴代の事務長 ■

氏名	期間
安河内 醇	昭和48. 8. 1～昭和50. 3.31
衛藤 司	昭和50. 4. 1～昭和54. 4.30
中島 俊彦	昭和54. 5. 1～昭和57. 6.30
内田 信夫	昭和57. 7. 1～昭和62. 2.28
平田 元祐	昭和62. 3. 1～平成 5. 3.31
白水 千里	平成 5. 4. 1～平成 7.11.30
檜崎 洋二郎	平成 7.12. 1～平成 9. 3.31
小柳 巖	平成 9. 4. 1～平成14. 3.31
福田 健	平成14. 4. 1～平成20. 3.31
江崎 和雄	平成20. 4. 1～平成25. 3.31
奥蘭 邦広	平成25. 4. 1～平成28. 3.31
菊地 光男	平成28. 4. 1～平成29. 3.31
立花 時弘	平成29. 4. 1～令和 2. 3.31
岳 弘司	令和 2. 4. 1～現在

■ 歴代の看護部長 ■

氏名	期間
吉岡 ハツ子	昭和48. 8. 1～昭和55. 3.31
富澤 美代子	昭和55. 4. 1～平成 1. 3.31
星加 幸子	平成 1. 4. 1～平成 8. 3.31
金子 純子	平成 8. 4. 1～平成10. 3.31
谷 泰子	平成10. 4. 1～平成20. 3.31
坂本 眞美	平成20. 4. 1～平成24. 3.31
中川 朋子	平成24. 4. 1～現在

福岡大学筑紫病院長就任のご挨拶

福岡大学筑紫病院 整形外科 柴田陽三（4回生）



烏帽子会の皆様
こんにちは。紙面をお
借りしてご挨拶を申
しあげます。令和元
年12月1日付けて
二期目となる福岡大
学筑紫病院長を再
任致しました柴田陽

三です。前任の向野病院長が院長任期の途中で御
定年を迎えられたために、私の一期目の任期はその
残りの半年を全うすることでした。めまぐるしい半年
間でしたが、その間になし得た事についてご報告申
しあげます。医師の働き方改革の一環として8月から
完全週休2日制を導入致しました。平日の労働時
間は1時間長くなりましたが、福岡大学規定集に則っ
た週40時間の労働時間を確保致しました。これまで
当院の医師の平均的な1日の労働時間は12-3時
間に及んでいたため、月間の平均超過勤務時間が
70時間を越えていました。なかには過労死レベルと
いわれる超過勤務時間80時間を越える医師も多くみ
られ、早急に改善の必要性がありました。土曜を休
みにし、平日の勤務時間を約1時間延長することで、
医師の月間超過勤務時間を40時間程度に減少させ
ることができました。また、週休2日制の導入によっ
て職員全体の生活の質の向上効果があったと思いま
す。これまでのように週に6日間働いていると、休み
の日に平日にできない家庭の仕事をこなざるをえま
せんでした。週休2日制の導入で、1日は家庭の仕
事、もう1日は真の安息日あるいはリクレーションにあ

てる事が出来るようになりました。しっかりと休養をと
ることで、翌週の仕事へのモチベーションを維持でき
るようになったと思います。職員のオンとオフのメリハ
リが利いたのか、ベッドの有効利用率は93-4%、1
日の平均ベッド単価、外来単価も高い水準を維持し
ています。

今後は医師・看護師が患者さんの診療行為に専念
できるように、医療事務を代行する医療事務補助員
の増員を行ってまいりたいと存じます。仕事効率があ
がることで、院内の医師を含めた全職員の労働環
境を改善してまいります。

また病院業務は医師、看護師、療法士、薬剤師、
技士、栄養士といった国家資格を持った専門家集団
の共同作業によってなされています。その高度に専
門化された医療行為は、事務の方々がとりまとめて保
険請求を行います。行った医療行為を適正に保険
請求すること自体が非常に高度の知識と経験を要し
ます。しかも2年ごとに算定法が変更になります。そ
のため長期展望に基づいた専任医療事務職員の養
成が必要です。大学執行部に御願いをして来年度
からは専任医療事務職員を採用できるようになりまし
た。今後の病院収支の改善を行ってまいりたいと存じ
ます。

まだまだ改善を要する課題を有しておりますが、
筑紫病院の利点である良好な院内のチームワークを
元に一步一步前に進んでまいりたいと存じます。烏
帽子会の会員の皆様におかれましては福岡大学筑
紫病院への引き続きの御支援を御願い申しあげま
す。

福岡大学西新病院長就任挨拶

福岡大学西新病院 循環器内科 三浦 伸一郎 (11 回生)

2019年12月1日より福岡大学西新病院の病院長に就任いたしました。西新病院は、2018年4月1日に福岡市医師会より開院し、「地域に信頼される医療の提供」を方針として運営されています。昨今の医療を取り巻く状況は、大変厳しいことは言うに及ばません。その中で「患者さん中心の医療」を提供し、地域医療のニーズに答えることができるように病院の経営改善に関するアイデアを積極的に実行、各診療科や多職種との連携を重んじて職員のモチベーションの向上を図ることにより、西新病院を成長型組織へ育て、発展的改革の実現に向けて努力する所存です。

診療科目は、循環器内科、消化器内科、呼吸器内科、糖尿病・代謝・内分泌内科、一般内科、小児科、脳神経内科です。地域の医療機関からの紹介患者を速やかに受け入れ、その特徴を活かして福岡大学病院などの高度専門医療機関との密な連携により、地域医療と高度医療とを橋渡しできる新しい形の地域医療連携を目指しています。

また、福岡大学の3病院は、循環器内科診療を実施しており、心臓・血管内科学講座（当講座出身も含む）として、福岡大学病院循環器内科の43名の医師はもちろん当講座の所属であり、福岡大学筑紫病院循環器内科（10名）と福岡大学西新病院循環器内科（6名）へも多くの医師を出向させています。今後、福岡大学の循環器医療が飛躍的に発展するために、3病院の各循環器内科の特性を生かしつつ三位一体となり、相補・互換性を持った運営に努める必要があります。

最後に、患者様をご紹介していただいている先生方、同窓会の先生方には、今後ともご指導・ご鞭撻を宜しくお願い申し上げます。



福岡大学西新病院

2020年1月6日の仕事始めに朔学長が西新病院をご訪問されました！



北尾事務長 勝田副病院長 朔 学長 三浦 入江副病院長 椎葉看護部長 井上部長 西川部長

教授就任挨拶

教授就任のご挨拶

福岡大学医学部 腎臓・膠原病内科学 教授 升 谷 耕 介 (特別会員)



升 谷 耕 介
教授 略歴

昭和 45 年 (1970 年) 1 月 23 日生
(満 50 歳)

■ 略歴

- 平成 6 年 3 月
九州大学医学部卒業
- 平成 6 年 6 月
九州大学医学部附属病院
第二内科 研修医
- 平成 7 年 6 月
九州中央病院内科
- 平成 8 年 10 月
福岡赤十字病院内科
- 平成 9 年 4 月
新日鐵八幡記念病院内科
- 平成 10 年 6 月
九州大学医学部附属病院
腎疾患治療部 医員
- 平成 12 年 4 月
九州大学医学部研究生
- 平成 13 年 4 月
九州大学大学院医学研究院
(病態機能内科学) 入学
- 平成 17 年 3 月
同修了、医学博士取得
- 平成 17 年 4 月
九州大学病院第二内科 医員
- 平成 18 年 4 月
九州大学病院腎疾患治療部 助手
- 平成 22 年 6 月
ピッツバーグ大学
病理学移植病理部門研究員
- 平成 24 年 9 月
九州大学病院腎・高血圧・脳血管
内科助教
- 平成 28 年 12 月
九州大学病院腎疾患治療部 講師
- 平成 29 年 4 月
福岡大学医学部腎臓・膠原病
内科学 准教授
- 令和 2 年 4 月
福岡大学医学部腎臓・膠原病
内科学 主任教授

この度、腎臓・膠原病内科学主任教授を拝命いたしました升谷耕介と申します。新型コロナウイルス感染症が国内外で猛威を振るうという、全く想定していなかった状況での着任となりました。診療科と中央診療部門である血液浄化療法センターを統括し、患者の生命を守ると同時に、当科医師、コメディカル、関係各科・部門の方々の安全確保に努めて参ります。近い将来、必ずこの困難を乗り越え、理想とする腎臓病・膠原病診療、教室運営に戻れることを切に願っております。

私は平成 6 年に九州大学医学部を卒業し、同第二内科(現病態機能内科学)に入局しました。関連病院および大学病院勤務、大学院を経て 2005 年に同教室の教員となりました。研究テーマは免疫学的異常が糸球体腎炎の発症と進行に与える影響で、九州大学で腎移植が増加してからは移植腎病理に関する研鑽を積みました。これを機に 2010 年から 2 年間、米国ピッツバーグ大学病理学に留学しました。帰国後も主に移植腎病理診断および腎移植患者の診療に従事していましたが、ご縁がございまして 2017 年に福岡大学に参りました。

福岡大学においては、自身の得意分野と、教室員が得意とする診療との融合を進めてまいりました。今後も腎臓病の早期診断と早期治療、腎不全の進行抑制・阻止、末期腎不全患者には最良の腎代替療法による QOL の維持、長期生存の達成を目指して参ります。膠原病に関しても、近年大きく進歩した分子標的薬による疾患の寛解と臓器合併症の予防を目指します。また、分子標的薬、免疫チェックポイント阻害薬の普及に伴い新たな腎障害や、膠原病様の病態が出現しており、各科・部門の皆様と共に診療、研究を進めて参りたいと思います。

教室運営については、元来小さな教室であるため、大学病院にも関連病院にも十分な人員を配置できておりません。それでもこの 3 年間で 3 つの関連病院に専門医資格を有する診療部長を就任させることが出来ました。関連病院で若手医師の教育を行い、新入局員を募り、教室の勢力拡大を図ってまいります。新型コロナウイルス感染症のため、令和 2 年度の学生教育は大きな打撃を受け、特に臨床実習が被る影響は来年度まで尾を引きます。臨床実習カリキュラムの改訂、診療参加型実習への転換を進め、福岡大学の卒業生が大学病院や地域医療機関で卒後 1 年目から即戦力として活躍できる時代が来ることを願っています。研究に関しましても課題は多いですが、先代の中島衡先生が作ってこられた長崎県壱岐を舞台とする慢性腎臓病に関する疫学研究 (ISSA-CKD 研究) をさらに発展させ、地域医療への貢献と共に、大学院生の学位取得、教員の育成を進めてまいります。

浅学非才の身ではございますが、教室をさらに発展させ、福岡大学医学部、福岡大学病院のため、粉骨砕身努力させて頂きたく存じます。烏帽子会の皆様におかれましては、末永く御指導、御支援を賜りますよう、何卒宜しくお願ひ申し上げます。



令和 2 年 4 月某日、この時だけマスクを外して撮影しました。

教授就任のご挨拶

福岡大学医学部 腎泌尿器外科学 教授 羽賀 宣博 (特別会員)



羽賀 宣博
教授 略歴

■ 略歴

平成1年 3月
茨城県立土浦第一高等学校卒業
平成9年 3月
福島県立医科大学 医学部
医学科 卒業
平成9年 4月
福島県立医科大学医学部
泌尿器科学講座 研修医
平成19年 9月
医学博士
平成22年 4月
福島県立医科大学医学部
泌尿器科学講座 助教
平成26年 12月
福島県立医科大学医学部
泌尿器科学講座 学内講師
平成28年 11月
福島県立医科大学医学部附属病院
泌尿器科・副腎内分泌外科
副部長 (兼任)
平成29年 1月
福島県立医科大学医学部
泌尿器科学講座 講師
平成30年 11月
福島県立医科大学医学部
泌尿器科学講座 准教授
令和2年 4月
福岡大学医学部
腎泌尿器外科学講座 主任教授

■ 診療専門分野

- ・泌尿器科腹腔鏡下手術、
ロボット支援手術
- ・腎癌
- ・前立腺癌
- ・副腎腫瘍
- ・小児泌尿器科

■ 研究専門分野

- ・前立腺肥大症発症メカニズムの
解明
- ・QOL改善を目指した前立腺癌手術
療法
- ・再発低減化を目指した泌尿器科癌
の腹腔鏡手術
- ・膀胱機能・神経因性膀胱

令和2年4月1日付で、福岡大学医学部 腎泌尿器外科学講座の主任教授ならびに診療部長を拝命いたしました。伝統ある福岡大学腎泌尿器外科学講座を3代目田中教授より引き継ぐこととなりました。大変な重責のために自身が押しつぶされそうですが、福岡大学医学部腎泌尿器外科学講座の更なる発展を目指して、私心を捨て、粉骨砕身努力をしておりますので、烏帽子会会員の皆様の温かいご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

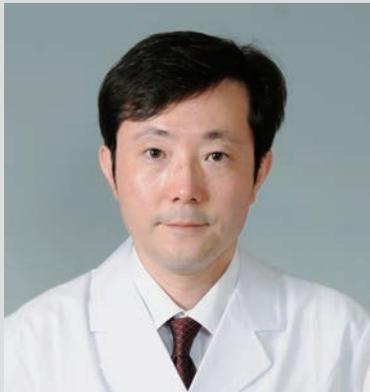
私の経歴は、略歴にもございますように、福島県立医科大学を卒業後、一度も福島県外に出ることなく、県内で継続して医師としての研鑽を積んでまいりました。医師としてのキャリアの半分以上は関連病院で勤務しておりましたので、地域医療に従事した期間が他の先生方と比べると、大変長いということが、私の特徴かと思えます。その特徴を生かし、患者さんに寄り添い、患者さんにとってベストな治療をご提供・ご提案し、福岡大学病院のモットーである「温かい医療」を実践していきたいと考えております。

泌尿器科診療は、近年、大きく様変わりしました。手術に関しては、現在、私の専門とする手術支援用ロボットを用いた低侵襲手術や、腹腔鏡手術がメインとなりました。また、泌尿器癌の薬物治療も、免疫チェックポイント阻害薬や分子標的薬等が、続々使用可能となっています。そして、診療分野も小児泌尿器科、腎移植、婦人泌尿器科等に細分化され、泌尿器科学という枠組みだけでは収まりきらなくなっています。これらの診療分野をカバーし、きめ細やかな医療を提供するには、マンパワーが必要です。私は、講義や実習等の学生教育を通じて、泌尿器科学の魅力を伝え、1人でも多くの学生に興味を持って頂き、多くの泌尿器科医を育てたいと考えております。

研究に関しては、私は、排尿障害や前立腺肥大症の発症機序の解明に向けた基礎的研究を行う一方で、癌の再発低減化を目指した新術式の開発や、QOLを維持するための術式の開発等に取り組んでまいりました。福岡大学でも継続して、自身の研究を行うと共に、基礎研究に関しては、基礎講座の先生方のご援助を頂きながら、新たな分野にも挑戦し、泌尿器科学の進歩に貢献したいと考えております。若輩者ではありますが、どうぞよろしくお願いいたします。

教授就任のご挨拶

福岡大学医学部 生理学 教授 藤田 孝之 (特別会員)



藤田 孝之
教授 略歴

- 1989年3月
福岡県立東筑高等学校 卒業
- 1989年4月
横浜市立大学医学部医学科 入学
- 1995年3月
同上 卒業
- 2001年3月
横浜市立大学医学部 大学院
医学研究科 博士課程 修了
- 2004年4月～2007年3月
テキサス大学ヒューストン
健康科学センター 博士研究員
- 2008年4月
横浜市立大学医学部
循環器・腎臓・高血圧内科学
助教
- 2012年4月
横浜市立大学医学部
循環制御医学(旧第一生理学)
講師
- 2020年4月～
福岡大学医学部
生理学講座 主任教授

この度令和2年4月1日付で、井上隆司先生の後任としまして、福岡大学医学部生理学講座の主任教授を拝命いたしました、藤田孝之と申します。烏帽子会会員の皆様にご挨拶を申し上げます。

当講座は1972年の医学部創設と同時に開講されました。伝統的に、筋細胞における興奮収縮連関のメカニズムの解明を中心とした研究を展開し、近年では分子生物学や電気生理学的手法なども用い、循環器系をはじめ様々な分野の発展に大きく寄与する報告を続けてこられました。この度、この歴史ある生理学講座を担当させていただくことになり、その責任の重さに身の引き締まる思いでございます。

私は北九州市に生まれ、県立東筑高校を卒業した後、横浜市立大学医学部に進学いたしました。卒業後は循環器内科の大学院に進み、臨床診療に従事しつつ、急性心筋梗塞の発症メカニズムに関する臨床研究に携わりました。一方で、臨床診療の中で「より有効な循環器疾患治療・予防方法の必要性」を実感し、このころから生理学講座でも、基礎研究を開始いたしました。ヒューストン健康科学センターへの留学の後、生理学教室の教員として、心不全や不整脈などに対する治療法の進歩に向けて、交感神経系の情報伝達メカニズムや、心筋細胞死の制御などに着目し、大学院生や海外からの留学生の方々とともに研究を進めてまいりました。

私はこのようなこれまでの経験から、臨床につながる研究を行うことを基本方針としています。教育の上でも、臨床を念頭においた基礎医学の知識を身につけていただくよう、心がけていきたいと考えております。また各分野の専門の方々と連携することで、質の高い研究成果に貢献していきたいと存じます。様々な形での共同研究などを提案させていただければ幸いです。

教室員それぞれが成長しつつ、リサーチマインドを持った学生を育て、力を合わせて研究を進め、地域社会に貢献していける環境を整えることが、私の責務であると考えます。教室員一丸となって、尽力してまいりたいと存じます。浅学の身でございますが、ご指導ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

教授就任のご挨拶

福岡大学筑紫病院 病理部・病理診断科 教授 二 村 聡 (特別会員)



二 村 聡
教授 略歴

■ 学歴

昭和 63 年 3 月
日新館高等学校卒業
平成元年 4 月
久留米大学医学部医学科入学
平成 7 年 3 月
同大学卒業

■ 職歴

平成 7 年 4 月
東京慈恵会医科大学病理学教室
助手
平成 8 年 4 月
同大学附属病院病理部 診療医員
平成 12 年 6 月
国立がんセンター中央病院
臨床検査部病理
(現 国立がん研究センター中央病院
病理診断科) 診療医員
平成 16 年 10 月
福岡大学医学部病理学講座 助手
平成 20 年 4 月
同 兼任講師
平成 25 年 10 月
同 講師
平成 29 年 4 月
同 准教授
令和 2 年 4 月
福岡大学筑紫病院病理部・
病理診断科 教授

令和 2 年 4 月 1 日付で福岡大学筑紫病院病理部・病理診断科教授に就任いたしました二村聡と申します。初代部長 岩下明德 教授に続いて、私が二代目となります。烏帽子会会員と医学生の皆様にご挨拶を申し上げます。

私は平成 7 年に久留米大学卒業後、直ちに東京慈恵会医科大学病理学教室に入門し、厳しい先輩方から病理解剖と外科病理学の基本を叩き込まれました。その後、国立がんセンター中央病院臨床検査部勤務を経て、平成 16 年 10 月に福岡大学に赴任し、令和 2 年 3 月末日まで同病理学講座に所属しておりました。卒後から現在に至るまで一貫して外科病理診断に従事する傍ら、学生講義・実習のほか、消化器診療に携わる臨床医と共同研究を行ってきました。

さて、当病理部は昭和 60 年に筑紫病院が開設されて以来、代々の熱意あふれるスタッフによって診療の質を基盤から支えてきました。患者さんがいま抱えている疾病の質や進行度を肉眼的・組織学的に診断することが私たち病理部の主な業務です。患者さんを苦しめている病変を見極めるための標本作製する確かな技術と、病理医という客観的な立場からの病理診断なくして最適な治療を選択することはできません。また、治療の結果を病理診断という科学的な方法で冷静に検証しなければ、診療の質の向上は危ういものになってしまいます。したがって、病理部はほとんどすべての診療科からの診断の要求に応えなければなりません。丹精込めて作製した標本で冷静に診断を下し、それに基づいて実施された治療によって患者さんが快方に向かったことを知る喜びは、私たちが味わえる誇り高い喜びと言えます。そのためにも常に知識・技術・経験を研ぎ澄ませ、顕微鏡を通じて病理標本の向こうに見える患者さんの苦しみと臨床医の熱意に応えて、最大限の適正な病理診断を速やかに差し上げられるよう、いまま心身を磨いています。

これからも多くの患者さんやそのご家族、医療者の方々から揺るぎない信頼を寄せていただけるよう、そして筑紫医療圏における盤石な病理診断の拠点であり続けられるよう、私たちは一歩ずつ着実に進んでいきます。

どうか筑紫病院病理部・病理診断科を、厳しく、しかし温かい目で応援していただきたいと思います。そして、病理診断医を目指している若手医師をご存知でしたら、ぜひとも当病理部にお越しくださいますよう、お伝えください。

どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

自己紹介と教授就任に際しての所感

福岡大学筑紫病院 循環器内科 教授 河村 彰 (17 回生)



河村 彰
教授 略歴

■ 学歴

昭和 60 年 3 月

私立泰星高等学校 卒業

平成 6 年 3 月

福岡大学医学部医学科 卒業

■ 職歴

平成 6 年 5 月

福岡大学病院第二内科

臨床研修医

平成 9 年 4 月

福岡大学筑紫病院内科学 助手

平成 10 年 4 月

福岡大学病院第二内科 医員

平成 15 年 10 月

ドイツミュンスター大学留学

平成 19 年 4 月

福岡大学医学部 心臓・血管内科学

助教

平成 21 年 10 月

福岡大学病院 循環器内科 講師

平成 27 年 4 月

福岡大学病院 卒後、

臨床研修センター 准教授

令和 2 年 4 月

福岡大学筑紫病院 循環器内科

教授

令和 2 年 4 月 1 日付で福岡大学筑紫病院（以下、筑紫病院）循環器内科の教授・診療部長に就任いたしました、河村 彰と申します。

私は平成 6 年に福岡大学医学部を卒業後、福岡大学病院内科学第二講座（現在の心臓・血管内科学講座）に入局し、荒川 規矩男教授・現名誉教授、朔 啓二郎教授・現福岡大学長、三浦 伸一郎教授に師事いたしました。その後、済生会福岡総合病院などで、主に冠動脈インターベンション、すなわち虚血性心疾患や心不全といった疾患を中心に、循環器一般の臨床に従事いたしました。部外修練より福岡大学病院に帰ってからは、冠動脈疾患患者を対象とした臨床研究を行い、その研究論文の一つで学位を取得いたしました。その後、当時の朔 啓二郎教授のお許しを得て、ドイツのミュンスター大学へ留学させて頂き、脂質と炎症性サイトカイン、動脈硬化についての研究を行い、研究結果を論文発表いたしました。この経験から、動脈硬化や炎症性サイトカインに関しての興味も得るに至りました。帰国後、平成 25 年からは、福岡大学病院 卒後臨床研修センター副センター長に就任し、医学教育にも携わりました。ここでの経験から、医師、人間として優秀な人材を確保、輩出するには教育が大変な重きをなし、同時に医師は一生涯、教育を受け、自己研修に励むべきだと痛感させられました。教授として今後、医学教育へも注力していきたいと考えています。

さて、平成 30 年度の筑紫病院循環器内科の外来患者数は平均 43.6 人/日で、循環器科入院患者数は 755 人でした。心臓カテーテル検査 529 例、経皮的冠動脈形成術 152 例、末梢動脈形成術 25 例、永久ペースメーカ植え込み術 30 例です。今後、当科では冠動脈インターベンションの症例数増加を目指すのは勿論の事、不整脈に対するカテーテルアブレーションの確立も目指して参ります。また、地域医療支援病院である筑紫病院は、地域医療への貢献は命題であると考えます。筑紫野市の人口は、30 年間で約 39000 人増加しており、平均寿命も、平成 27 年で男性 81.0 歳、女性 87.5 歳と、男女ともに延びています。今後、患者の超高齢化により「心不全パンデミック」の襲来が予想されております。当科では、来る心不全パンデミックに備えると同時に、広く地域に開かれた病院を实践すべく、病診連携ネットワークの構築が急務であると思っております。当科においては、急患を速やかに受け入れ、症例を選ばず、病診連携に特に積極的で、常に地域医療への貢献意識を持った診療を实践したいと考えております。

未曾有の COVID-19 大流行により、想像とはかなり違う教授職のスタートとなってしまいましたが、今できることを実践し、流行収束後の V 字回復の準備を怠らない様、心がけたいと考えております。今後とも皆様のお力添えを、是非とも宜しくお願い申し上げます。

教授就任のご挨拶

福岡大学筑紫病院 呼吸器内科 教授 石井 寛 (特別会員)



石井 寛
教授 略歴

昭和 45 年 2 月 18 日生

■ 略歴

昭和 63 年 3 月：久留米大学附設高等学校
卒業
平成 元 年 4 月：長崎大学医学部入学
平成 7 年 3 月：長崎大学医学部卒業
平成 7 年 5 月：長崎大学医学部第二内科
(研修医)
平成 8 年 2 月：佐世保市立総合病院内科
(研修医)
平成 8 年 6 月：宮崎医科大学第三内科
(研修医)
平成 8 年 10 月：国立嬉野病院内科
(研修医)
平成 9 年 4 月：健康保険諫早総合病院
呼吸器内科 (医員)
平成 12 年 4 月：長崎大学医学部第二内科
(医員)
平成 14 年 3 月：ブリティッシュコロンビア
大学留学 (Post-doctoral
fellow)
平成 15 年 3 月：長崎大学大学院
医学研究科修了
平成 16 年 7 月：平成会 女の都病院内科
(医長)
平成 18 年 4 月：大分大学医学部呼吸器内科
(助教)
平成 24 年 4 月：大分大学医学部呼吸器内科
(講師)
平成 25 年 4 月：福岡大学病院呼吸器内科
(講師)
平成 28 年 4 月：福岡大学病院呼吸器内科
(准教授)
平成 30 年 4 月：福岡大学病院呼吸器内科
(副診療部長・診療教授)
平成 31 年 4 月：福岡大学筑紫病院呼吸器
内科(准教授・診療教授)
令和 2 年 4 月：現職

令和 2 年 4 月 1 日付で福岡大学筑紫病院呼吸器内科の診療部長・教授に就任しました石井 寛と申します。私は福岡市生まれで、地元の公立小中学校から久留米大学附設高校を経て平成 7 年に長崎大学医学部を卒業し、循環器内科医を志し長崎大学第二内科に入局しました。しかし宮崎大学への出向中に、現在の長崎大学第二内科教授である迎 寛先生から呼吸器の道へ導かれました。平成 18 年から縁あって大分大学第二内科に移籍し、呼吸器の臨床と研究に関わってきました。平成 25 年に渡辺憲太郎第二代教授の許しを得て福岡大学に中途入局し、平成 31 年 4 月から福岡大学筑紫病院に勤務しております。私はこのような経歴を通じて多くの方々に支えられてきました。これからはその人脈と経験を生かし、当院の基本理念でもある日々のあたたかい医療の実践によって地域医療へ貢献するとともに、各地で不足している呼吸器内科医をこの地から増やせるような魅力ある診療科になるよう、粉骨砕身する所存です。

当科は平成 22 年に独立し、初代部長の永田忍彦先生らが当初 4 名で呼吸器の専門診療を開始しました。その後最大 9 名体制となり原則すべての入院依頼に対応してまいりました。しかし福岡大学病院呼吸器内科の人手不足もあり、現在は 6 名体制となっております。喘息などの common disease から、肺癌、間質性肺炎等の難治性疾患に至るまで、多様化した呼吸器疾患全てに対応しています。超高齢社会の現在、高齢者肺炎は患者さんの end of life に家族や医療・ケア関係者がどのように寄り添うかという課題に直結しています。統合的なシステムを構築するための取り組みを始めたところです。当院は市中病院的側面を併せ持った地域医療支援病院でもあり、若い医師にとっては救急医療から高齢者医療まで経験することができ、臨床研修に適した施設と言えます。現在は第二種感染症指定医療機関としての使命を果たすべく COVID-19 感染症の終息を祈りながら多忙な日々を送っております。今後とも筑紫病院呼吸器内科をどうぞ宜しくお願いいたします。

教授退任のあいさつ 「学生・患者を想って過ごした22年半」

福岡大学名誉教授（前腫瘍・血液・感染症内科学教授） 田村和夫（特別会員）



1997年10月に宮崎県立宮崎病院から福岡大学（以下、福大）に赴任して22年半が経ち、2020年3月31日をもって定年退職しました。一般病院からの赴任で福大内では多少戸惑いがあった

たかもしれません。ただ、私にとっては宮崎医科大学のベッドサイド教育・講義、同医科大、九大、自治医大卒業生と寝食をともにしての患者のケアを通し、卒後教育を米国で受けた者ではありますが、日本の学生・若手医師の実力は理解しており、その指導に何ら不安はありませんでした。本稿では、福大内科学講座の変遷と私が取り組んだ医学教育について記載します。

1. ナンバー内科から7臓器別内科講座の誕生

私が2015年まで主宰していました腫瘍・血液・感染症内科学講座の歴史を少しだけ紹介します。私が赴任してきたときは2つのナンバー内科と赴任半年前に開設された山田教授主宰の神経・健康管理学講座の3つの内科学講座がありました。私は奥村前教授の後を受け半年遅れで、内科学第一の教室を主宰することになりましたが、消化器、糖尿病・内分泌、血液内科をカバーし、多くの教室員がいました。その後、患者や他の医療機関に分かりやすいように臓器別に教育・診療にあたる方向性が示され、内科学第一からは消化器内科、糖尿病・内分泌科講座が次々独立し、内科学第二から感染症科学を受け入れ、現在の腫瘍・血液・感染症内科学講座となりました。最終的に7つの内科講座になりましたが、内科全体としてのスタッフ数は増えませんが、各講座のスタッフは減り、追い打ちをかけるように新専門医制度が負に作用し、教室員や大学院生の減少を招いています。

2. 学生・患者のための大学医学部・病院そして教員

教授内定がおりた時から医学部・大学病院が医療機関として機能するためにはどうしたらよいかを当時の医局長・病棟長と協議し教室作りを着手しました。私個人としては、時間とエネルギーを教育（学生・研修医教育）に7割、診療に2割、研究に1割を割くと決め、2015年に役職退任するまで実践しました。担当の腫瘍・血液内科学については、各教員に任せられていた講義内容を整理し冊子を作って学生へ配布、サーバーを置いて血液や組織のカラー写真をWeb上で閲覧できるようにしました。卒前・卒後臨床教育の一環として毎朝8時から全員参加の新患紹介と問題症例の検討、夕方はその日実施された検査や治療経過のチェックを行う小カンファランスを行いました。上級医が学生や研修医を指導する際、必ず患者を診ることを上級医に要求しました。昼間の病棟は無医村と言われていた状況は払拭されたものと思います。こういった一講座の取り組みの貢献度は分かりませんが、学問・研究、患者を診る姿勢について学生やスタッフに伝えられたと思っています。

大学院生教育に対しても、医学研究科の委員や科長をするなかで、独り立ちできる研究者養成を目指しました。さらに、大学病院は卒前・卒後臨床教育の場で医療の質の担保が重要です。病院機能評価を念頭に、副病院長、病院長の役を得て質の向上に向け大いに議論し実践しました。しんどかったですが、良い思い出となりました。

この22年半、悲喜こもごもいろいろありましたが、総じて充実した楽しい時を過ごすことができました。それは教室員、医学部・医学研究科、病院のスタッフ、関係者、烏帽子会の先生方の支援なしにはできませんでした。ありがとうございました。

最後に烏帽子会の発展ならびに会員の皆様・ご家族の健康とご多幸を祈念いたします。

福岡大学医学部に期待すること

－ 教授退任にあたって －

福岡大学名誉教授（前精神医学教授） 西 村 良 二（特別会員）



私は昭和50年に入職しました。当時、まだ福大病院まではバスが通ってなくて、七隈四つ角のバス停で降り、菊池神社の脇を歩いて通勤していました。夜

になると、四つ角は真っ暗でした。今や、地下鉄が開通し、環状線が走り、道幅が広がり、七隈四つ角には飲食店が立ち並び、福岡大学とともに発展しています。私は平成元年から広島大学に勤務しましたが、平成11年に福岡大学へ戻って20年半、合計33年6ヶ月、福岡大学医学部にお世話になりました。この間、大過なく、仕事を全うできましたのも、皆様のおかげであると感謝しております。

退任にあたって、福岡大学医学部に期待することを話したいと思います。現代は価値観が多様化し、人間の価値、生きる価値をはかる物差し（尺度）がわからなくなっています。心のどこかで「それはちょっと違うなあ」と思いながら、私たちは仕方なく、「お金」を最大公約数の物差しとしているのではないのでしょうか。これと同じことが医学部では、医師国家試験合格率だと思います。悔しいけど、一喜一憂しています。これを価値のX軸とすると、Y軸は社会に出てからの福大出身者の評判の良さだと思います。教育効果は卒業後にわかるものです。これをうまく測定する尺度があればいいのですけど。

現代、求められているのは、他人からの承認欲求です。これが人を動かします。だから、褒めて育て

ることがいっそう大事です。福大の医学部生は自信を失いがちです。私たちの世代は、叱られて育って、ここまで来たわけですが、だからといって、同じように叱って育てる、ということがもう通じなくなってきたのです。本人がここを褒められたいと思っているときに、タイミングをはずさず褒めることが肝心です。

さて、福大医学部の1、2、3期生が60歳代後半に突入しています。開業して忙しい30歳代後半から40歳代、子どもを医学部に進学させるために苦慮するのが40、50歳代。後継ぎもできてほっとし、やっと、母校を振り返って、母校愛が高まってくる時期が60歳代後半からです。同窓会活動がいっそう活発となり、いろいろと寄付も増えると思います。

そういう中、追い風です。医学部から初の学長がうまれたのです。まことに、おめでたいことです。他の学部から遅れて医学部が設立された大学の場合、後発の医学部から学長が出るのは、だいたい、医学部の設立から50年の頃です。福岡大学では、もう少し後かな、と私は思っていたのですが、医学部から念願の学長が出たのはきわめて嬉しいことです。はじめての医学部からの学長は注目されています。評価があれば、次々と医学部から学長が出ることになりましょう。他大学ではそうです。だから、医学部内で、いろいろ意見の違いはあるでしょうが、医学部や同窓会が1つになって学長を応援するのが望ましく思われます。

それでは、最後になりますが、福岡大学医学部のますますの発展を祈願して、私の教授退任の挨拶とさせていただきます。本当に、長い間、ありがとうございました。

プロフェッショナルを目指すということ

福岡大学医学部 前腎臓・膠原病内科学 教授 中 島 衡 (特別会員)



令和2年3月31日をもって福岡大学医学部腎臓・膠原病内科学を定年退職いたしました。平成19年10月1日から勤務いたしましたので、12年間余を過ごさせて頂いたことになります。すっかりお

世話になりました。ありがとうございました。

当初はリウマチ・膠原病診療の担当医として、斉藤喬雄教授の下で過ごさせて頂いておりました。病棟にて毎週のように実施される腎生検の組織像を、斉藤先生と病理学教室の故久野敏先生から解説を頂きながら眺めることができたことは、私の大きな財産になりました。多くの内科の患者さんがそうですが、特に膠原病の患者さんは、病を発症して、病院を受診するという行動に移すまでに、自身で身体に現れた変化に気づき、不安とともに十分に病気である可能性を覚えつつ受診されてきます。我々はこの過程を、実際に患者さんの口から聞き取り、経過と検査成績とを照らし合わせることで、患者さんごとの診断までのストーリーを組み立てます。時には他疾患の合併や治療が加わり、これらが複雑に絡む場合がありますが、それぞれを紐解いていくうちに基盤にある基礎疾患を明らかにすることができる場合があります。診断の醍醐味だと思っています。腎疾患では、この過程にさらに生検した組織の病理学的所見が加味されます。形質細胞やマクロファージの浸潤、制御性T細胞の出現などが明らかになると、出来上がっていくストーリーの奥深さが増すだけでなく、疾患の病態を細胞、組織レベルで具体的に感じることができます。診断だけではなく、なぜこの病像が作り出されるのかという仮説が醸し出されます。この魅力を感じることができただけでも素晴らしい経験をさせて頂いたと感謝しています。

医学部は、学力偏差値の高い人たちの集合体です。そして学生はどの学部よりも多大な勉強量を強

いられます。入学試験や進級試験を合格するためには、学習分野ごとの中央に位置する最も重要なコア(核)となる部分を理解することが求められています。いち早く掴み取ることが出来る人は、コアの周りを迷ってなかなかコアそのものを掴み取ることができない人に比して、優秀だと評価されます。無駄な部分を削って、必要な部分だけをいかに早く自分のものにするかを競います。しかし多くの関心事が“how to”に縛られてきたように感じます。それは大切なことであり、とても重要なことです。しかし、資格をとったあとに、さらなる上位のプロフェッショナルを目指す時には、この姿勢を見直さなければいけないのではないかと思います。時間をかけて、大きく全体を捉えて、コアにまとわり付く曖昧模糊とした、一見無駄のように見えるものにも関心を持って、そこに焦点を当てて“why”の姿勢で取り組むことが、学力偏差値の高い人たちにとっては、一段階ステップアップすることに繋がることではないかと思えます。当たり前と思われていることに対しても、なぜそう思われてきたのか? 本当に正しいのか?と疑問を投げかける姿勢が、さらなる飛躍には必要なのではないかと思えます。「円周率 π が3.05より大きいことを証明しなさい。」2003年東大の入学試験・数学の設問です。巷では円周率は3で良いのではないかという意見も出ていた、“ゆとり教育時代”に、東大は“why”を感じる人を欲しいことをアピールした設問であると話題になりました。私たちが、これまでも聴き慣れてはきたものの、よく理解ができていない「医はアートである」という言葉も、同じようなことを指しているのではないかと思います。

専門医資格を獲得するために、氾濫するガイドライン、診断基準、EBMを頭に詰め込むことに一生懸命な若い時代もちろん必要ですが、ゆっくりと自分の領域を深く掘り下げて、深いところから全体を見上げるような時間を持つこともプロフェッショナルを目指す上で大切なことではないでしょうか。福岡大学医学部、病院で働かれている若い医師、研究者ならびに同窓会諸氏の今後のご発展を心よりお祈り申し上げます。

福岡大学病院で経験した腹腔鏡手術と ロボット手術の思い出

福岡大学名誉教授（前腎泌尿器外科学教授） 田中正利（特別会員）



福岡大学医学部腎泌尿器外科学講座を2020年3月末に定年退職しました。これまで大変お世話になりました福岡大学の皆様に深甚なる感謝の意を表します。

私は2003年4月に九州大学から福岡大学に赴任し、腎泌尿器外科学(旧泌尿器科学)講座に17年間在職しました。泌尿器科領域の腹腔鏡手術を専門分野の1つとし、九州大学在職中から副腎腫瘍や腎細胞癌に対する腹腔鏡手術の執刀医や指導医を務めてきました。福岡大学に赴任後も腹腔鏡手術の発展と普及に寄与することをメインテーマとし、自らの手技の向上に努めるとともに、後進の指導にあたりました。赴任後間もなく、病院長の白日高歩先生（現福西会病院理事長）のご支援のもと、高度先進医療を目指し、当時九州ではごく一部の施設だけでしか行われていなかった、難易度の高い前立腺癌に対する腹腔鏡下前立腺全摘除術に取り組みました。他大学で起こった死亡事故の影響で、同手術を一時中断せざるを得ませんでした。開腹手術への移行や問題となる合併症は1例も生じることはなく、10例を完遂することができました。そして2006年2月に高度先進医療に承認され、また保険診療を行うための施設基準もクリアし、助手を務めてくれた田丸俊三先生、入江慎一郎先生とともに大きな達成感を得ることができました。同年6月以降当科において、腹腔鏡下前立腺全摘除術は限局性前立腺癌に対する第一選択の標準術式になりました。

2015年8月には九州で最初に導入した最新型手術支援ロボット「ダビンチ Xi」を使用し、ロボット支援

下前立腺全摘除術を行いました。ロボット手術の特徴である、3Dカメラで映し出された高解像度の立体画像を見ながら、人間の手以上に器用な動きが可能で、術者の手と完璧に連動して動くロボットアームを操作し、まるで自分の手でメスや鉗子を持っているかのような感覚で手術をすることができました。その時の感動は今でも脳裏に焼き付いています。術後の尿漏れが腹腔鏡手術に比べて少ないなどのロボット手術のメリットも実感することができました。その後、前立腺全摘除術においては、ロボット手術が腹腔鏡手術に取って代わりました。2017年6月からは小径腎細胞癌に対するロボット支援下腎部分切除を開始し、順調に症例数を増やすことができました。さらに最近は産婦人科、消化器外科、呼吸器外科領域でもロボット手術が普及してきており、福岡大学病院の「高度先進医療を提供する大学病院として最新の医療技術を導入し、個々の患者に応じた最善の医療を提供します。」という綱領の1つを実行する上でロボット手術の貢献度は高いと思います。

最後になりますが、福岡大学の益々のご発展を祈念し、退職のご挨拶と致します。



退職後に思うこと

福岡大学名誉教授（前生理学教授） 井上 隆 司（特別会員）



月日が経つのは早いもので、福岡大学を定年退職してから既に一ヶ月が過ぎようとしております。コロナ感染拡大による外出自粛要請とも相俟って自宅でゆっくりとした時間を過ごしておりますと、福岡大学にお世話になった15年間の出来

事が次々と思い出され、（ほんのちょっと前の事なのに）懐かしくさえ感じられる今日此頃です。久々に時間に余裕ができたので読書に勤しんでおりますが、中でも最近話題のパオロ・ジオルダーノの「コロナの時代の僕ら」と以前流し読みにとどめていたラース・スヴェンセンの「退屈の小さな哲学」を精読し、自分自身や自分の家族、引いては祖国や世界の今後の行く末や処し方について深く考えさせられました。

100年に一度の災厄ともいわれるコロナパンデミックは、我々の生活を一変させ、同時に先の見えない未来への不安を掻き立てています。特に、face-to-faceのコミュニケーションが困難な現状では、教育・医療・経済を含む様々な局面で既存の社会システムが崩壊の危機に瀕しており、どのようにしてそれを存続させ新しい形へと変容させることができるのか、社会全体に突き付けられた喫緊の課題となっております。既に個人レベルではFacebook、TwitterやLine、Skypeなど多くのSNSがその役割の一部を担っていますが、大勢の人間が、会社や学校などの特定の管理された組織だけでなく、自由行動に基づいた不特定な環境下で集まり繋がるために有用な方法や技術は依然未熟なままです。勿論、巷ではZoom等のWeb系アプリを介して、様々なレベルのオンラインミーティングやイベントが開かれているようですし、福岡大学でもWebexという双方向のオンライン授業システムが始動していると聞きます。しかし、apprenticeship的教授法を伝統とする医学教育においては、どのようにしてこれまで通りの緊密な対面型コミュニケーションを基礎とした教育を維持できるのか、あるいはこれと等価の教育を全く違う形で行うにはどのように変革していったらいいのか（例えばソーシャルネットワーキングやバーチャルリアリティーで

完全に代替できるのか）、未だ暗中模索の段階にあります。そしてそれ以上の逼迫したコミュニケーション上の問題が、医療従事者による日々の診療活動にも大きな混乱を引き起こしているようです。

今回のコロナ感染拡大で図らずもクローズアップされたように、これからの医学教育や診療活動では、好むと好まざるとに関わらず、既成の枠にとらわれない新しいコミュニケーションの方法を確立していくことが不可欠です。そこでは人と人の関わりには何が本質的なのかを改めて根本から問い直す姿勢が求められています。福大医学部・病院の職員の方々におかれましては、今まさに困難な変革の時に直面され日々奮闘されていることを十分承知いたしております。しかし、このような緊急かつ逼迫した時期であるからこそ、健全な組織とは個人レベルの良好な繋がりや協同があって初めて成り立つものであることを再認識していただきたいと願う次第です。そこでは、即効性を期待したトップダウンの方策だけでなく、大学間や地域コミュニティとの密接な連携・協力はもとより、学生、職員、OG/OB等、多様な「当事者」による「草の根」的な自発的・持続的協同活動が重要な変革力となるはずですが、福岡大学の真のブランドとは正にそのようにして全員で築き上げていくべきものだと思います。

最後になりましたが、これまで15年間大変お世話になりました。在職中は、二期の医学研究科長を始め幾つかの役職を経験させていただき、大変勉強になるとともに充実した時を過ごさせていただきました。この場を借りて心より御礼申し上げます。また私事ながら今年運よく科研費を獲得できたこともあり、今後しばらくは福岡大学の研究特任教授としてライフワークの完了に注力するつもりです。また機会があればいつでも福岡大学のために微力を尽くしたく存じます。これまでと変わらずご指導ご鞭撻を賜りますよう心からお願い申し上げます。



福岡大学への感謝と期待

福岡大学名誉教授（前教育計画部教授） 出石 宗 仁（特別会員）



昭和 49（1974）年、開設間もない福岡大学病院の初年度研修医として採用して戴いて以来、第二内科（のち心臓・血管内科）、教育計画部、総合医学研究センターと所属は変わりましたが去る

3月末まで46年間の殆どを福岡大学で過ごさせて戴きました。ふり返ってみますと福岡大学医学部の第1回生から43回生まで、4429名の卒業生の皆さんとお会いたこととなります。昔の臨床実習や研修中の皆さんに対しては、今では不適切とされるような指導をしたことがあったのを思い出し、時代の変遷を感じています。長い間、学生時代から医師として活躍されるまでの皆さんの成長を目にしながら勤務できたことは私の最大の喜びでした。同窓生の皆様には改めてお詫びとお礼を申し上げます。

第二内科では荒川教授のもとで、高血圧を中心とする診療や研究とともに講義や臨床実習指導に参加し、2年間の海外留学も経験することが出来ました。後半は大学院生の学位論文作成を支援し、その後、朔教授の御推挙により教育計画部に異動しました。

教育計画部では教務委員として当時の学部長や前任の教務委員の先生によって始められていた教育改革を引き継ぎ、カリキュラムや教育手法の改善、学生さんの進級や卒業判定に関わり、国家試験合格率の向上を目指して頑張ったつもりですが、特に国家試験合格率の向上とその維持は極めて難しいことを思い知らされました。しかし、成績の振るわない学生さんの指導の際に「先生たちは、福大の国家試験合格率を上げるために我々に厳しいことをいうのですか。私は自分のペースでやるのでほっといて下さ

い。」という声を聞くこともありました。卒業生の99%以上の方が医師として活躍しておられますので、これを社会から評価して戴けるなら良いのですが、現状では毎年の国家試験合格率が最も気になる指標となっています。卒業生が誇りを感じられる医学部にするために、社会からの評価の指標である国家試験合格率の改善は最重要課題の一つだと思います。そのためには、医学部、病院、大学本部の一致協力体制の構築が必要だと考えていましたが、残念ながら教職員全員が同じ目標に向かって協力するという雰囲気を感じたのは教育計画部設置当初のみでした。昨年末から、重要な役職が福岡大学卒業生で占められており協力体制の構築が期待されます。

総合医学研究センター在籍中は医学部の分野別認証評価にあたりFU RIGHTの作成に参加させて戴きました。その間に、かつて一緒に研究していた大学院生のなかから三浦教授が誕生したのもうれしい出来事でした。

大学では今、COVID-19に対して全学一致の体制で立ち向かっておられると思います。その早期終息を願うとともに、協力体制を維持され医学生・研修医・大学院生教育の変革が進み、皆が「教育=共育」を理解し、良い「校風」が醸成され受験生や研修医に選ばれる大学になることを願っています。



10年間お世話になりました。

福岡大学筑紫病院 前呼吸器内科 教授 永田 忍彦 (特別会員)



2010年4月から2020年3月までちょうど10年間福岡大学筑紫病院にお世話になりました。赴任当時の診療科は内科第二で、糖尿病と呼吸器の診療を担当しました。半年後に内科第二は呼吸器

内科の二つの診療科になりましたが、それぞれの診療科が正式に独立したのはさらにその半年後で、私が福岡大学筑紫病院に赴任して1年後でしたので、最初の1年間は回診、カンファレンス等の診療はもとより歓迎会、送別会などの医局行事も糖尿病の先生と一緒にさせていただきました。筑紫病院赴任当時呼吸器内科の医師は4名(写真)(糖尿病の医師は1名)で、内科第二の診療領域である呼吸器、糖尿病診療の充実、患者増を期待されていたと思いますが、大学病院の呼吸器内科としてはマンパワー不足の状態、折角筑紫病院に呼んでいただいたのですが、期待に答えることができるか大変不安な毎日でした。最初の1年間を一緒に過ごした写真の4名の医師が筑紫病院呼吸器内科の出発点(原点)であり、この時のことを忘れないように、この写真は今でも大切にしています。とにかく診療実績を上げないと医師を増員してもらえない状況でしたので、当時の先生方には大変無理なお願いをして申し訳なかったのですが、数年間はとにかく診療実績を上げる(患者数を増やす)ことに専念しました。時間がたつとともに近隣の医療機関や地域住民の皆様にも呼吸器内科が認知されるようになり、外来患者数、紹介患者数、入院患者数とも順調に増加し、その結果医師数増員も認められ、医師数が増えることにより多くの入院患者に対応できるようになるという正のスパイラルが生まれ、赴任当時は想像もできませんでしたが、医師数9名(助教以上5名、助手4名(うち1名は救急部卒))の診療科になりました。これは一重に当時の病院長(岩下教授、向野教授)と医師派遣に御配慮いただいた福岡大学呼吸器内科渡辺教授(当時)の御支援によるもので、大変感謝しております。赴任当初は全ての御紹介にお答えすることができませんでした。医

師数が増えるとともにほぼ全ての入院依頼に答えることができるようになりました。冬場の寒い時期には入院患者数が30台後半になることも少なからずあり、病棟担当の各先生方には大変な負担をかけてしまいました。かなりの肉体的、精神的ストレスであったと思いますが、多少の愚痴は聞いたものの、黙々と診療に従事してくれたことには大変感謝しています。このことからわかりますが、福岡大学の先生は基本的に素直な先生が多いように思います。組織をマネジメントする立場の人間からすれば大変仕事がやりやすい環境で、10年間さしたるトラブルもなく過ごすことができました。その分先生方にはストレスがあったのかもしれないのですが……。忙しい中診療をしっかりとっていただいたので、それ以上の要求はなかなかしづらいところですが、大学ですので、もっとリサーチマインドを発揮してくれたら、と思ったのも正直な気持ちですが、私の指導力が足りず申し訳なく思っています。そうはいつでも積極的に臨床研究に取り組んでくれた医師もいましたので、そのような医師にはさらに活躍の場所が与えられるとよいと思います。忙しい臨床業務に従事しながら、リサーチマインドを維持するのは簡単なことではありませんが、モチベーションを高くもって、日常臨床をする中で感じた疑問をそのまま放置せずに、それを臨床研究のシーズとして、小さいことでも構いませんので新しい知見を見つけることができるように日々取り組んでいただければ、と期待しております。それまで福岡大学とは全く縁のなかった私を温かく迎え入れてくれた福岡大学並びに筑紫病院の皆様には大変感謝しております。福岡大学の今後の益々の御発展を祈念しております。10年間大変お世話になり、ありがとうございました。



学会開催報告

第10回日本炎症性腸疾患学会学術集会－開催報告

福岡大学筑紫病院 臨床医学研究センター 二見 喜太郎 (1回生)

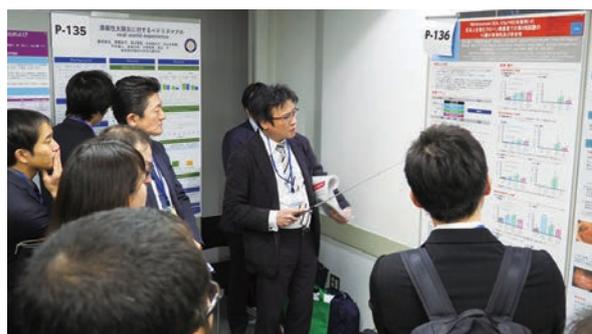
2019年11月29日(金)にアクロス福岡で開催、参加総数981名とこれまでに比べて約150名増加し各会場ともに早朝からほぼ満席で活発な議論の中、盛会裡に学術集会を終了することができました。

炎症性腸疾患(Inflammatory Bowel Disease: IBD)は広義には細菌性腸炎など種々の原因から生じる腸炎が含まれますが、この学会では狭義のIBD、即ち潰瘍性大腸炎(UC)、クローン病(CD)など原因不明の腸疾患が対象になります。IBD患者は世界的に増加しており、本邦では2017年の厚生労働省の集計でUC 22万人、CD 7万人と報告されており、今日では総数で30万人を超えていると思われます。IBDの特徴としては若年発症、再発を繰り返す難治性、長期経過での癌のリスクを挙げることができます。

私とIBDの出会いは1978年福岡大学第1外科(志村秀彦教授)研修医1年目になります。現在、卒後41年になりますが、当時担当した高校生のクローン病の患者さんは今も通院されており、学業、就職、結婚、妊娠、出産、子育ての中での闘病を強いられることになるのです。

IBDに対する本格的な取り組みは1985年筑紫病院の開設に始まります。恩師である外科 有馬純孝教授、消化器内科 八尾恒良教授の下で紹介患者は年々増加し、癌の手術よりも厄介なIBDに対する外科治療が私のライフワークとなっていったのです。年を重ねるごとに学会活動、論文作成についてもIBDが中心になり、2004年には厚生労働省難治性腸疾患研究班に加わり、全国のIBD診療医との交流を深めて様々な形でIBDの研究、診療に力を注いでまいりました。丁度この頃、新しい治療薬として生物学的製剤が開発されIBDの治療に大きな変革がもたらされました。とはいえ真の原因は未だに解明されていない現状で、患者が若いだけに病状、病態だけではなく個々の背景まで考慮した治療法の選択、内科、外科にコメディカルを加えた連携の下での診療が求められます。

このような背景を踏まえて、「進化するIBD診療－今あるべきやうわ」をテーマに掲げ、特別講演2、主要演題4、若手の研究発表1、症例検討1を企画し、



一般演題も含めて内容的にも高い評価を得ることができました。学会としては初めての外科医の主催で、全国のIBD外科医の代表として緊張感を持って企画・運営を行ってまいりましたが、同窓会をはじめ、筑

紫病院外科同門会、消化器内科同門会、志村基金の先生方の御支援が心強い励みになったことを御報告致します。多くの御厚情に紙面をお借り致しまして心より御礼申し上げます。ありがとうございました。



第16回日本整形靴技術協会学術大会の開催報告

医療法人たけうち 六本松 足と心臓血管クリニック 院長 竹内 一馬 (20回生)

この度、令和2年1月25-26日に福岡市内の福大メディカルホールにおいて第16回日本整形靴技術協会学術大会を開催しましたので、ご報告いたします。

学術大会は155名の参加、演題登録も一般演題(口演14題)、ポスター演題(4題)と多く発表していただきました。関連企画として、市民公開講座は約60人、福岡マラソン公認企画は約50名、介護企画は約40名と一般市民の来場がありました。学会のテーマは「生涯歩行のすすめ」としました。昨年、私が代表を務める「NPO法人足もと健康サポートねっと <http://ashimotokenko.com>」で出版した本のタイトルと被せました。

本学会は医療関係の学会ではなく、全国から「靴・足など」のプロフェッショナルが集まる靴関係者の全国学会です。今回は「フットケア」にも焦点を当てたこともあり「足や靴、フットケア、装具のことを学んでみたい」という看護師、義肢装具士、介護福祉関係者にも多数ご参加いただきました。

過去にも学会主催の経験はありますが、病院勤務や大学勤務ではなく、一開業医がこのような全国規模の学会を主宰するのはとても大変なことでした。学会運営は「NPO法人足もと健康サポートねっと」のメンバーで準備を進めました。当院スタッフのみならず、運営メンバーが居てくれたからこそ主宰すること

ができたのだと感謝しています。

別枠企画として特別企画2では、介護従事者が参加できる「介護と靴を考える」ワークショップも立ち見が出るほどの盛況ぶりで、介護関係者にも「靴の重要性」を知っていただく良い機会となりました。
<http://ivo2020.com/program.html>

特別企画1では、福岡マラソン公認企画「福岡マラソンを足トラブルなく走ろう!!」を開催、こちらも福岡マラソン公式FBやLINEでも情報を配信していただきました。会場が限られていたこともあり、多くはご参加いただけませんでした。反響がかなり大きく、こちらは今年の福岡マラソン前に同様の企画でまた開催できればと思っています。今年の福岡マラソンも医療の面から支えていきたいと思っています。ちなみに筆者は福岡マラソンでは3年連続で医療救護ランナーを務めています。

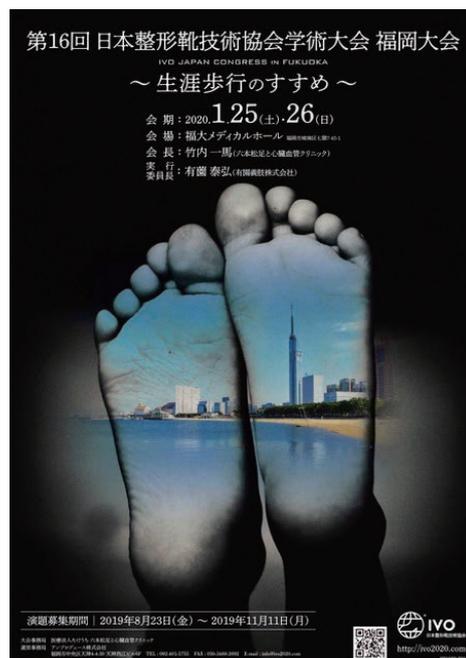
学会懇親会では、弦楽四重奏団（妻と音楽仲間）にクラシック音楽を奏でていただいただけでなく、サプライズで大会長自ら3曲ほどフルート演奏を披露いたしました。

このような記憶に残る学会を無事に主催できたことは、関係者の皆様、福岡大学医学部同窓会、心臓血管外科、心臓血管内科の同門会に多大なるご支援を

いただいたお陰でもあり、大変感謝しております。

一開業医で出来ることは限られていますが、超高齢化の中「生涯歩行」出来るような診療報酬を含めた医療システムの構築も課題だと感じています。日本フットケア足病医学会、靴医学会、循環器学会などとも連携し、微力ながら「足と心臓血管」を支える臨床現場で頑張りたいと思います。この度は本当にどうもありがとうございました。

今後ともご指導よろしくお願いたします。



ポスター



スタッフ集合写真

在外研修報告

Harvard Medical School/Massachusetts General Hospital における海外留学を終えて

福岡大学病院 救命救急センター 仲村佳彦 (27 回生)

救命救急センターの仲村佳彦と申します。このたび福岡大学医学部同窓会の在外研修援助金による留学資金の補助を頂き、無事にボストンにいます Harvard Medical School/Massachusetts General Hospital (以下、MGH) で 2 年間の研究留学を終えることができましたので本会報に簡単ではありますがその内容ご報告させていただきます。

わたくしは医学部大学院生の期間に福岡大学薬学部教員の先生方にご指導を頂き、急性期脳梗塞モデルマウスを用いて新たな脳梗塞治療法を探索するというテーマで基礎研究を行ってきました。大学院卒業後は薬学部の先生方のお力添えもありまして、世界最先端の脳梗塞に関する基礎研究を行っている MGH の Neuro Protection Research Laboratory (以下、NPRL) に留学する機会を得ました。NPRL は Professor, Eng H. Lo 率いる 6 名の Associate/Assistant Professor、合計 20 名程度のポスドク、インストラクターおよび学生等が所属する比較的大きなラボでした。わたくしは Assistant Professor の一人で、福岡大学薬学部の卒業生であります早川先生の下で研究を行いました。MGH は 2018-19 年 U.S. News Best Hospitals Rankings and Rating にて 4 位にランキングされ、臨床で高い評価を得ているのみならず、National Institutes of Health (NIH) の Grant 獲得数および金額は全米トップ 10 入りする世界屈指の医学研究施設でもあります。1 つの大学関連病院でこれほど大規模な臨床と研究施設を

備えていることに非常に驚きました。

わたくしが担当した主な研究テーマは様々な臓器から抽出したミトコンドリアの機能を調査し、さらにこれらミトコンドリアを脳梗塞モデルマウスに投与し、治療効果やそのメカニズムを調べる研究を行いました。最初は慣れない英語と格闘しながら苦勞の連続でしたが、徐々にラボのスタッフとコミュニケーションが取れるようになりました。留學生活の 2 年目になると研究のディスカッションのみならず、文化の違い、家族や子育てのことなどを雑談する余裕も出てきて、研究者としての交流のみならず友人関係を築けたことはわたくしの人生の大きな財産となりました。

2019 年 12 月からはじまった新型コロナウイルス感染はボストンへも 2020 年 3 月初旬より広がり始め、学校閉鎖、ラボへの出入り制限など人と人の距離を保つための対策が次々とはじまりました。そして、街の様子はあっという間に変化していきましました。感染拡大による移動制限がされに進むことが予想されたため、帰国を急遽早めてバタバタと帰国しました。そのためラボのメンバーと別れを惜しむ時間も十分にとることができませんでした。新型コロナウイルス感染が終息したらまたいつかボストンを訪れ再会を果したいと思います。

最後に留學生活を支えてくれた家族、在外研修援助金を支給して下さった福岡大学医学部同窓会、救命救急センター・同門会および福岡大学薬学部生体制御学教室皆様に感謝申し上げます。



研究の指導をして下さった早川先生と
(向かって左が筆者)



ラボメンバー(中央後方が筆者)

支部だより

大分県支部会（かぼす会）便り

大分県支部長 鬼木 寛 二（1回生）／日田中央病院

久し振りの便りです。日本だけの災害に留まらず、今では新型コロナウイルス(COVID-19)が中国の武漢に始まりアジア中心（日本もかなりの被害）に世界中に感染拡大を呈している今日この頃で早くの終息を祈るばかりです。

さて、昨年11月30日(土)に福岡大学医学部同窓会大分県支部総会を大分市都町のふく亭本店で開催致しましたが、会に先立っての講話はいつもは学問のお話ばかりでしたので、今回は演者を高木忠博鳥帽子会会長に、今回は鳥帽子会重田正義副会長にお願いして長年の夢であった、躍進した福岡大学の現況をお話して頂きました。長年の夢と申しましたのは、何と学長に第1回生の朔啓二郎先生(循環器内科主任教授を後輩の先生に譲り、医学部長を更にもう一期務めた後)が選出され、医学部長、病院

長、福大筑紫病院の病院長と福大西新病院の病院長の方々全て福大医学部卒業生が担うという快挙です。従いまして、我々地域の同窓会会員もしっかり応援して行かねばならないと思います。皆さん頑張ろうではありませんか！

ところで、各支部会も老兵(会長が学長には申し訳ありませんが)が居座るのではなく、中央・母体は経験者が大黒柱に成って頂き、若いエネルギーを持った、活力ある各支部会がサポートして、勿論学生も福大の向上や躍進の礎と成ってもらわねばならないと思います。

そこで、当「かぼす会」も若返りを図る為に私、支部長 鬼木寛二(1回生)が長年、平生6年6月25日発会式から居座って来ましたが、選挙は難しいです。私に私に適任と思われる後輩の諸君(すでに地域



(上段左から)岩男裕二郎(8)、難波美和子(8)、小野隆宏(11)、三浦徹也(9)、小宅民子(11)、藤木美和(16)
(下段左から)矢田公裕(7)、鬼木寛二(1)、招聘演者 鳥帽子会副会長 重田正義(2)

にて各病院、医院やクリニックの院長に就かれ頑張って居られる下記先生方)の中から指名させて頂きました。他理事、その他委員会委員や木下昭生先生は病院長や大分郡市医師会の岩男裕二郎先生など適任者は居られるのですが、福岡まで足を運ぶ(役員会などの出席等)のが難しいとのことでありました。

会 長 矢田 公裕 先生(7回生)
矢田こどもクリニック理事長・院長
(現在 別府市医師会長、その他
各委員会委員)

副会長兼会計 難波美和子 先生(8回生)
尾渡眼科医院院長
(現在 大分県眼科医会常任理事)

評 議 員 市川 弘城 先生(7回生)
皮膚科市川医院院長
岩男裕二郎 先生(8回生)
岩男病院 理事長・院長
(大分郡市医師会副会長、その他
各委員会委員)

以上若返りをさせて頂きました。

他会員の小野隆宏先生は大分県医師会の常任理事、その他委員会委員や木下昭生先生は病院長や大分郡市医師会の岩男裕二郎先生と共に副会長、また小宅民子先生も医師会各委員会の委員を務められたりで福大出身者も地域に根差して頑張っておられます。

現会長・鬼木寛二日田中央病院副院長と副会長・評議員中村英助別府中村病院理事長・院長は降りることに致しました。

各役員の任期は定款(今後決定)的には2年間として、再選は妨げないとし、副会長や評議員の選任は会長に一任とし、総会で承認と致します。支部会出席者が少ないので選挙は難しいですから、支部総会出席者に於いて選出・承認とさせて頂きます。もっと出席者を募ります。

最後に残念ですが、下記2名の会員が他界されましたので御冥福をお祈り(黙祷)させて頂きました。謹んで御報告させて頂きます。

相良 勝臣 先生(3回生) さがら小児科
生野 雄一 先生(9回生) 生野眼科医院



学生会員支援報告

M4 Student Dr. 認証・白衣授与式

福岡大学医学部 医学教育推進講座 教授 安元 佐和 (7回生)

本年度の Student Dr. 認証・白衣授与式は、新型コロナウイルス感染拡大の影響で、同窓会および父兄の臨席をご遠慮いただき、学生と学内関係者のみで簡略化して執り行われました。小玉医学部長の挨拶のあと、学年代表に student Dr. 認証証と同窓会から贈呈された白衣が授与されました。その後真新しい同窓会の白衣に腕を通し、94 名の新 Student Dr. 全員で「ヒポクラテスの誓い」を宣誓し、校歌斉唱、記念撮影で式を終りました。本来なら同窓会

会長を筆頭に同窓会理事の先生がたにもご臨席いただいておりますが、今年は新型コロナウイルス感染症流行のため、それが叶いませんでした。同窓会から白衣を贈呈頂きましたことに心から感謝を申し上げます。

その後さらなる感染拡大のため、緊急事態宣言の延長を受け、5月末まで臨床実習は開始出来ない状況が続いております。遠隔での web 症例カンファレンス、オンライン教材での自己学習を促しております。

実習が再開出来たら、医学生達は非常事態での経験を生かし、医療人としての責任を臨床現場で診療チームの一員として更に強く自覚して、臨床実習に参加してくれるものと期待しております。

新型コロナウイルス感染拡大は、医療の様々な現場に影響を及ぼしております。同窓会の皆様のご健勝をお祈りいたします。



白衣授与式

第114回 医師国家試験結果総括と学位授与の報告

福岡大学医学部 医学教育推進講座 教授 安元 佐和 (7回生)

令和2年2月8-9日に施行されました第114回医師国家試験は、3月16日に合格発表が行われ、福岡大学の合格率は、新卒93.9%、既卒77.5%、全体で89.1%という結果でした。福岡大学の卒業判定では留年が11名、国家試験受験者は、全体150名、新卒110名(1名未受験)、既卒40名でした。新卒者の合格率93.9%は過去10年間では一番高く、福岡大学医学部43年間では歴代4位の成績でした。本来なら卒業式、謝恩会で学生、教職員、同窓生一同となって、この43回生の国試合格をお祝いする予定でしたが、新型コロナウイルス感染拡大の折、卒業式、謝恩会も中止となり、個別の学位記受け渡しとなりました。ほとんどの卒業生が来学し、医学部長から学位記を受け取り、個別の写真撮影のみを行いました。ささやかながら卒業生にとっては記念に残る授与式になりました。

学年担任の印象として、43回生の特徴は学年全体の一体感でした。国試合格に向けてのピア学習

会、予備校の補習も学生自ら追加を申し出るという珍しい学年でした。学年全体をまとめ、教員との正しい情報共有を図ってくれた学生会会長の岡本君、国試に向けて学年のリーダーシップを取ってくれた西野君、それぞれのゼミ室で成績不振に悩む仲間を引っ張り上げたグループリーダー達の存在が大きかったと思います、また学生一人一人が素直に教員の助言を受け入れてくれたことが、国試の合格率に繋がったと感じています。

今年の卒業生は、新型コロナウイルス感染拡大による緊急事態宣言の中での臨床研修スタートとなりました。この経験を何年かのちの同窓会で懐かしく語り合える日が来ることでしょう。43回卒業生の皆さんが、FU-RIGHTを支えに、良医として幸せな人生を送ってくれることを心から祈念しています。

最後になりましたが、同窓会におかれましては、国試激励会、補習の際の差し入れなど多くのご支援をいただきましたことに、心から感謝申し上げます。



学位記授与を学部長よりいただく



学長もご一緒に

キャンパス便り

《令和1年度 烏帽子会賞受章者名簿》

受賞者	受賞対象
濱田 利尚	第108回日本病理学会総会 学生・研修医ポスター 優秀演題賞

第108回日本病理学会総会 優秀演題賞

濱田 利尚 (M5)

この度、第108回日本病理学会総会での学生・研修医ポスター発表部門において優秀演題賞を受賞させていただきましたので報告させていただきます。

令和元年5月11日に東京国際フォーラムで開催された日本病理学会総会第3日目の学生・研修医ポスター発表部門にて、「嚢胞状中膜壊死による若年成人の大動脈基部破裂の一部検例」という演題で発表しました。

会場では、ポスター発表の学生参加者の多さや、直前までリハーサルを繰り返す他大学の学生の発表に対する熱意に圧倒され、いい刺激を受けました。

実際のポスター発表では緊張はしましたが、病理学教室の先生方や6年生の先輩方の前で何度もリハーサルを繰り返していたので上手く出来ました。

また私が在籍する社会医学研究会で、日頃から効果的なプレゼン方法や実戦の仕方を勉強していたの

も良かったと思います。

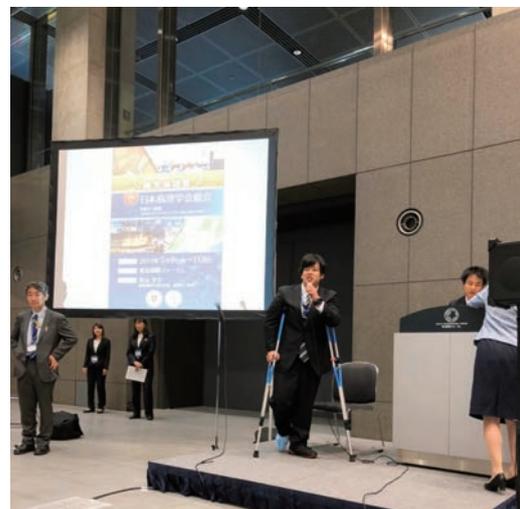
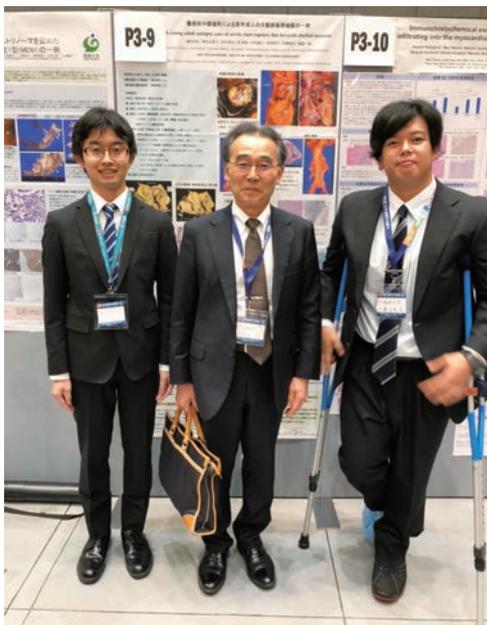
結果として優秀演題賞という荣誉ある賞を頂き、また学部学生受賞者の中で1人だけ受賞スピーチに選ばれ、とても良い経験になりました。

この時期に私は足を骨折しており、この回の学会発表を辞退しようかとも考えましたが、病理学教室の先生方のご支援や、私が在籍している社会医学研究会や柔道愛好会のメンバー、一緒に学会発表に行った大野くんをはじめ、周りの同級生の協力もあり何とか東京まで行き発表することができました。

学会発表にあたって、病理解剖・組織診断・論文研究・学会発表のスライド作成まで病理学教室で勉強させていただきました。

先生方にはお忙しい中時間を割いて頂き、本当にお世話になりました。

最後になりますが、今回多くの方の力を借りて優秀演題賞をいただくことが出来ました。この場を借りて感謝申し上げます。ありがとうございました。



訃 報

正 会 員	浜 崎	潤 先生	令和 2 年 2 月 25 日	ご逝去 (1 回生)
正 会 員	石 田	浩 三 先生	令和 1 年 12 月	ご逝去 (3 回生)
正 会 員	高 田	洋 一 先生	令和 1 年 8 月	ご逝去 (8 回生)
正 会 員	青 柳	玲 先生	令和 2 年 1 月 23 日	ご逝去 (8 回生)
特別会員	有 馬	純 孝 先生	令和 2 年 3 月 3 日	ご逝去
特別会員	金 岡	毅 先生	令和 2 年 3 月 4 日	ご逝去

椎 教次 先生を偲んで

池田クリニック 池 田 稔 (7回生)

福岡大学医学部泌尿器科学教室開設時のモットー「臨床を大事に、一例一例を大切に」を貫き、臨床医として地域医療に尽くしてこられた椎教次先生が、令和元年6月15日に食道癌でお亡くなりになりました。享年62歳。

「だいぶ元気になったとよ。そっちは変わりなか?」。ご病気だと聞いていたのに電話の声はいつもの様子で、「近くだから行ってみてよ」と知り合いのワイン店を紹介されました。それから数か月後の訃報でした。

椎先生と私は、昭和59年泌尿器科入局の同期です。研修医時代、仕事を終えた夕方、医局の研修医

部屋に集まっては1日の反省会。普段は私の愚痴の聞き役の椎先生でしたが、度が過ぎると「お前ねえ〜」と意見してくれました。ある時、椎先生行きつけの焼鳥屋が、偶然にも私が学生時代に所属していた福岡市早起きソフトボールチームの監督の店だと分かり、それからは研修医部屋の続きを焼鳥屋で。今思えば、大変な研修医時代を乗り越えられた貴重な反省会でした。

その頃の私たちの楽しみといえば、年2回開催される九州泌尿器科懇話会。1日目の学会ではなく2日目の大学対抗野球大会です。各大学が持ち回りで幹事校になり、春が1、2回戦、秋が準決勝、決



写真1：優勝旗をもつ椎先生

勝。1か月前になると、17時には白衣をジャージに着替え、近くの空き地で練習に励んだものでした。

当時は野球好きの先生が多く、教授自らバッターボックスに立たれるなど、各大学とも張り切って参加し、毎回白熱した試合が展開されていました。ある年の懇話会は福岡大学の担当。もちろん学会の準備も大変ですし、そんな訳で、野球大会のお世話はもっと大切です。そのため、郊外にある野球場の宿泊施設に前泊して備えていたのですが、土曜日はあいにくの雨。「きっと明日は中止ですよ。飲みましょう」と深酒をしてまだ寝ている私を含めた前泊メンバーを尻目に、椎先生は6時前には起床してグラウンドの状態を確認し、開催決定の判断。プレイボールの9時には、グラウンドも乾き薄日がさす絶好の野球日和になっていました。大会が無事終わり、坂本公孝教授から「椎、やって良かったな」と労りの言葉をかけられて安堵の表情を浮かべる椎先生の姿を今でも覚えています。

実は野球は椎先生の得意種目。中学生の頃はエースで、宮崎県の軟式野球大会では上位の常連校だったことを最近奥様から伺いました。どうりでコントロールが良く、けん制球もスピーディでした。「俺のはシヨンベンカーブやけん」と謙遜されるその球をキャッチャーの私は後逸ばかり。その時だけは「池田ねえ～、取ってくれよ」とぼやかれました。その後、私がカーブを受けることができるようになった頃には、野球好

きの後輩も入局し、見事2回の優勝。もちろん椎先生がエースです。このことは、泌尿器科医局みんなの良い思い出になっています。

研修医時代、一番緊張したのはカンファレンス。どちらかといえば要領だけで切り抜けようとする私と違い、「先行つといて」と直前まで検査データやカルテをチェックしてカンファレンスに臨まれていました。椎先生が田川市立病院出張から戻られて再び一緒になりましたが、しばらくするとご実家の事情で故郷宮崎市にお帰りになり、お父様の有床診療所をお継ぎになりました。

それからは、福岡の学会で会ったときなどに「一杯どうですか」と誘っても、患者さんがいるからとすぐに宮崎へとんぼ返り。入院をもって一人でやっていくのは大変です。「人に任せられない性格でしたから」という奥様の言葉は、とりもなおさず、研修医時代の“一例一例を大切に、丁寧に”という姿勢がずっと変わらなかったということの証です。「診療所を空けられないから、旅行も行けないし。唯一の楽しみが近場のゴルフだったのです」に、一途な臨床医を支えた奥様の気持ちを感じました。

先日、紹介されたワイン店に行ってみました。「俺飲めなくなったけど、子ども達が好きだから」と、熊本へ移転する直前まで宮崎の店に来てもらったことを店主は感謝していました。

椎教次先生のご冥福を心よりお祈りいたします。



写真2：優勝祝賀会で（左が椎先生）

福岡大学筑紫病院外科 名誉教授 有馬 純孝先生を偲んで

福岡大学筑紫病院 外科 二 見 喜太郎 (1回生)

2020年3月3日、恩師 有馬 純孝 先生(福岡大学筑紫病院外科 名誉教授)がご逝去されました(享年82歳)。

有馬先生は九州大学医学部を卒業後、同大学第一外科に入局、北九州市立小倉病院(現北九州医療センター)などで外科修練を積み、1975年6月に福岡大学第一外科 志村 秀彦 名誉教授の下に講師として赴任されています。

私との出会いは第一回生として同外科に入局した1978年の春になりますが、そのシャープなメス捌きは専門の消化管外科手術だけでなく、肝胆膵、乳腺、甲状腺と幅広く、駆け出しの外科医の目にはまさにsuper surgeonとして強烈な印象となり、脳外科医を目指していた私が消化器外科に方向転換した最大の原因になったのです。また、手術台を前に醸し出され

る緊張感も忘れることは出来ません。開腹手術の時代、第一助手としての最初の結紮にかかる緊張感は外科医ならではの醍醐味、背筋が伸びて清々しささえ感じたものです。そして、お供するお酒の席での外科領域を越えた医師、社会人としての様々な教訓は参考書では学べない人生訓として今でも深く心に残っているのです。1985年、福岡大学筑紫病院の開設に際して、外科部長として赴任されましたが、当時7年目の私に誘いがあり一回生として課せられた責務とも受け取って両手を挙げて志願したのは前年5月のビアガーデンのことでした。消化器内科の八尾 恒良 名誉教授の赴任も承知しておりましたので、両先生の下で消化器疾患の研鑽を積めることにこの上ない喜びを感じたものです。地域医師会の反発の中での筑紫病院の始まりでしたが、とにかく福岡大学のOBがこ



退任時手術室で

の病院を育て、発展させるのだとの強い気持ちを持って若輩のわれわれを育てていただき、症例の積み重ねとともに地域の中核病院として、また全国的にも筑紫病院の存在が評価されるようになったのです。

2005年8月 有馬先生倒れる。S状結腸憩室の穿孔による汎発性腹膜炎の緊急手術です。当時67歳、種々の合併症を有した中で医局員が一丸となつての治療、毎日の外来と予定手術をこなしながら刻々と変化する全身状態に躊躇することなく先手を打つことを合言葉に、まさに one team として有馬チルドレンは闘い、肝機能が改善した術後5日目のスタッフの笑顔は忘れることができません。オヤジの腹にメスを入れる私にとって生死の瀬戸際での緊急手術に比べ、6ヶ月後の人工肛門閉鎖を行った時の方が緊張が強かったことも今では懐かしい思い出です。2008年3月定年での退任、最後の執刀は横行結腸癌で

弟子や看護師に囲まれた手術場との別れは笑顔でした。退任後は適当に有馬チルドレンと杯を交わしながらゆっくりと過ごしておりましたが、2年前に腎不全で透析導入、昨年夏には転倒による大腿骨頸部骨折で手術、退院後のリハビリ中に転び再骨折での治療中に突然の大量下血を来たして、82歳の生涯を閉じられました。卒業して42年、有馬先生の存在なしに消化器癌そして炎症性腸疾患に対する外科医としての私は考えられません。もう好きだったアサヒスーパードライをつぐことは出来ませんが、有馬イズムは筑紫病院外科を巣立ち様々な領域で活躍している有馬チルドレンにとっても、確かな道標として心の奥深く刻まれているものと思います。長い間本当にありがとうございました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。「潔き 桜のごとく 恩師逝く」合掌。



手術中の有馬先生

森本健司君を悼む

松 本 信一郎 (4回生)

烏帽子会からの封書が届き、会費滞納のおとがめ! かと思ひながら、封を切ったら、森本君が亡くなった!?

それから、福大の学生時代の出来事が走馬灯のように思い出されてきました。

私たちは、1972年入学の、いわゆるナナニーです。当時の多くの医学部と同様、福大も最初の2年間は医学進学課程と称し、教養科目は9号館、語学は本学のあちこちでの講義でした。専門科目は2年次の後半開始でしたが、3年時からは語学以外は医学部キャンパスでの講義になっていました。2年から3年に進級することを烏帽子池の池越えと称していました。今もそうなのでしょうか?

我々は、多くの仲間とともに池越えに失敗して、2年の裏。ナナニーは少数派になり、お互いが近くなったと思います。記憶は定かではないのですが、森本君と仲良くなったのは、その頃からかと思ひます。ようやく池越えを果たしてから、交流が強まったかと思ひます。私たちは北九州の小倉高校OBであり、殊に親近感があったと思ひます。森本君はスポーツマンで日曜、休日は軟式野球、また休日はゴルフをされていたようです。私は運動ダメ人間でしたが、軟式野球は何度か声をかけていただき、参加させてもらいました。また、構造力学実習(私の下宿は工学部生が大部分で、麻雀をそう呼んでいました)、また同じナナニーの矢野良夫さん(現在、大分県で眼科を開業)、ナナサン(1973年入学)のデコボーこと井上廣さんと徹夜で将棋を指し、あるいはナナニーの林英之君(福大眼科教授に君で失礼)、ナナサンの宇野卓也君(現:小倉医師会長)も加わり、野球談議(プロ、高校、大学野球)に花を咲かせていました。鼯鼠は

みな異なっておりました。森本君はライオンズ(埼玉に行く前の西鉄→クラウンライター→太平洋クラブライオンズ)でしたがファイターズ(東映→日拓ホーム→日本ハム)、バッファローズ(近鉄→オリックス)、ジャイアンツ(巨人)ファンが入り乱れ徹夜になるのもしょっちゅうでした。さらに政治、芸能界などに関しても活発に論争をしていました。夜な夜な若い男が集まり、話の内容がエロ話でないのが素晴らしいですね! 当時、一世を風靡したインベーダーゲームも。もちろん試験前には皆で勉強の不足分の確認(結果論ですが、実際には試験に出そうにもないところを完璧に覚えていたのかもしれませんが)や、出題予測の交換もしていました。まさに青春を共有した、輝かしい時代でした。

卒業後は、森本君は第5内科、私は産婦人科に入局しましたので、互いに忙しく、また学外出張とかで一緒に大学に勤務する時期は少なく、あまり会うこともなくなってしまいました。その後、ご実家は行橋市の内科病院で、戻られ、地域医療に邁進されていました。奥様にお話を伺ったところ、60歳頃から腎機能低下、64歳で透析導入になっていたとの由。昨年、肺炎を起こされ2週間で急逝されたとのことでした。2019年3月15日、享年65歳。お子様3人は独立されているとのことでした。

仲間の訃報に接し、久しく会っていなかったのが悔やまれます。

私も60歳台後半。改めて健康について考えています。月並みで申し訳ないけれど、ご冥福をお祈りいたします。COVID-19が収まったら積もり積もった話をしよう。徹夜将棋はまだ先の楽しみにとっといてくれ。

医局長・医長名簿

(○内の数字は福大医学部卒業回)

令和2年4月現在

	医 局 長	病棟医長	外来医長
[福岡大学病院]			
腫瘍・血液・感染症内科	佐々木 秀 法	中 島 勇 太 ③①	茂 木 愛 ②⑤
内 分 泌 ・ 糖 尿 病 内 科	元 永 綾 子 ②⑦	濱之上 暢 也 ③②	高 士 祐 一
循 環 器 内 科	志 賀 悠 平 ②⑥	二 見 真 紀 人	末 松 保 憲
消 化 器 内 科	石 橋 英 樹 ②③	阿 部 光 市	高 田 和 英 ②⑤
呼 吸 器 内 科	井 形 文 保 ③④	平 野 涼 介	青 山 崇
腎 臓 ・ 膠 原 病 内 科	伊 藤 建 二 ②⑤	高 橋 宏 治 ③②	永 室 尚 子
血液浄化療法センター		安 野 哲 彦 ②④	
脳 神 經 内 科	合 馬 慎 二 ②③	藤 岡 伸 助 ②⑥	小 倉 玄 睦 ③⑤
精 神 神 經 科	飯 田 仁 志 ③②	原 田 康 平	大 串 祐 馬
〃 (デイケア)			永 野 健 太
小 児 科	石 井 敦 士 ③⑩	太 原 鉄 平 ③⑩	井 原 由 紀 子
消 化 器 外 科	塩 飽 洋 生 ②⑥	愛 洲 尚 哉	槇 研 二
呼吸器・乳腺内分泌・小児外科	宮 原 聡	徳 石 恵 太	阿 部 創 世 ③③
整 形 外 科	木 下 浩 一 ②⑥	田 中 潤	坂 本 哲 哉
形 成 外 科	森 田 愛	山 口 崇 之	鈴 木 翔 太 郎
脳 神 經 外 科	野 中 将 ①⑥	福 本 博 順 ③⑤	松 本 順 太 郎 ③②
心 臓 血 管 外 科	林 田 好 生 ②⑩	寺 谷 裕 充 ③①	尼 子 真 生
皮 膚 科	柴 山 慶 継 ②⑦	清 水 裕 毅	山 口 和 記
腎 泌 尿 器 外 科	入 江 慎 一 郎 ①⑦	松 崎 洋 吏 ②⑦	宮 崎 健 ③④
産 婦 人 科	宮 原 大 輔 ②⑩	倉 員 正 光 ③④(産科)	深 川 怜 史 ③②(産科)
〃		吉 川 賢 一 ③⑥(婦人科)	伊 東 智 宏 ②⑨(婦人科)
眼 科	原 田 一 宏	岡 村 寛 能	伊 崎 亮 介 ③⑤
耳 鼻 咽 喉 科	大 西 克 樹 ②⑤	打 田 義 則 ③④	妻 鳥 敬 一 郎 ③②
放 射 線 科	浦 川 博 史 ①⑤	赤 井 智 春 ②⑦	坂 本 桂 子
麻 酔 科	富 永 健 二 ③⑩	平 井 規 雅	柴 田 志 保 ②⑥
歯 科 口 腔 外 科	瀬 戸 美 夏	喜 多 涼 介	吉 野 綾
病 理 部	濱 田 義 浩 ①④		
臨 床 検 査 部	大 久 保 久 美 子		
輸 血 部	熊 川 み どり		
救 命 救 急 セ ン タ ー	入 江 悠 平 ③①	水 沼 真 理 子	
総合周産期母子医療センター		瀬 戸 上 貴 資 ②⑥(新生児部門)	
〃		岩 中 剛 (3階南病棟)	
総 合 診 療 部	増 井 信 太 ②⑨	日 吉 哲 也	崎 原 永 志 ③③
東 洋 医 学 診 療 部	坂 本 篤 彦		
薬 剤 部			
臨 床 研 究 支 援 セ ン タ ー			
卒 後 臨 床 研 修 セ ン タ ー			
[福岡大学筑紫病院]			
筑紫病院 (総医局長)	工 藤 忠 睦 ②③	(内分泌・糖尿病内科)	
循 環 器 内 科	※池 周 而 ②④	山 本 智 彦 ③⑩	足 達 宣 ③⑩
内 分 泌 ・ 糖 尿 病 内 科	工 藤 忠 睦 ②③	重 岡 徹 ③③	小 林 邦 久
呼 吸 器 内 科	串 間 尚 子	木 下 義 晃	石 井 寛
消 化 器 内 科	宮 岡 正 喜	古 賀 章 浩 ②⑨	丸 尾 達 ③⑩
小 児 科	吉 兼 由 佳 子 ①⑨	平 井 貴 彦 ③⑥	堤 信 ②④
外 科	東 大 二 郎 ①⑤	宮 坂 義 浩	吉 田 康 浩 ②④
整 形 外 科	秋 吉 祐 一 郎	南 川 智 彦	蓑 川 創 ③⑩
脳 神 經 外 科	井 上 律 郎 ②⑨	新 居 浩 平 ②④	井 上 律 郎 ②⑨
泌 尿 器 科	平 浩 志 ①⑤	平 浩 志 ①⑤	宮 島 茂 郎 ②②
眼 科	藤 田 秀 昭	藤 田 秀 昭	山 口 宗 男
耳 鼻 い ん こ う 科	梅 野 悠 太 ③④	梅 野 悠 太 ③④	前 原 宏 基 ③⑥
放 射 線 科	山 本 良 太 郎 ②②		
救 急 科	松 尾 邦 浩 ⑧		
麻 酔 科	若 崎 る み 枝		
内 視 鏡 部			
病 理 部	原 岡 誠 司		

※印は循環器内科、内分泌・糖尿病内科、呼吸器内科、消化器内科の代表医長

教育職員人事 (講師以上)

(○内の数字は福大医学部卒業回)
[令和 1.10.2 ~ 令和 2.4.1]

区分	所属	資格	氏名	発令日	摘要
退職	整形外科	准教授	金澤和貴	1.12.31	
	産婦人科	准教授	村田将春	1.12.31	
	生 理 学	教 授	井上隆司	2. 3.31	
	腫瘍・血液・感染症内科学	教 授	田村和夫	2. 3.31	
	呼吸器内科学	教 授	中島 衡	2. 3.31	
	腎泌尿器外科学	教 授	田中正利	2. 3.31	
	総合医学研究センター	教 授	出石宗仁	2. 3.31	
	総合医学研究センター	教 授	西村良二	2. 3.31	
	筑紫呼吸器内科	教 授	永田忍彦	2. 3.31	
	内分泌・糖尿病内科学	准教授	野見山 崇	2. 3.31	
	麻 醉 科 学	准教授	東 みどり子	2. 3.31	
	寄付研究連携細胞病態解析学講座	准教授	渡辺信和	2. 3.31	
	呼吸器内科	准教授	松本武格 ^⑳	2. 3.31	
	内 視 鏡 部	准教授	竹田津英稔	2. 3.31	
	循環器内科	講 師	岩田 敦 ^㉑	2. 3.31	
	呼吸器・乳腺内分泌・小児外科	講 師	位籐 俊一	2. 3.31	
	耳鼻咽喉科	講 師	竹内寅之進	2. 3.31	
	腎泌尿器外科学	講師(4-7)	古屋隆三郎 ^㉒	2. 3.31	
	眼 科 学	講師(4-7)	佐伯有祐	2. 3.31	
	整形外科	講師(4-7)	木山貴彦 ^㉓	2. 3.31	
救命救急センター	講師(4-7)	川野恭雅 ^㉔	2. 3.31		
筑紫循環器内科	講師(4-7)	岡村圭祐 ^㉕	2. 3.31		
筑紫呼吸器内科	講師(4-7)	宮崎浩行	2. 3.31		
筑紫呼吸器内科	講師(4-7)	竹田悟志 ^㉖	2. 3.31		
採用	腫瘍・感染症・内分泌内科学	准教授	磯部泰司	2. 4. 1	
	呼吸器内科学	准教授	井上博之	2. 4. 1	
	耳鼻咽喉科	講 師	田浦政彦	2. 4. 1	
	総合周産期母子医療センター	講師(4-7)	伊崎智子	2. 4. 1	
昇格	生 理 学	教 授	藤田孝之	2. 4. 1	
	腎臓・膠原病内科学	教 授	升谷耕介	2. 4. 1	
	筑紫循環器内科	教 授	河村 彰 ^㉗	2. 4. 1	
	筑紫呼吸器内科	教 授	石井 寛	2. 4. 1	
	筑紫病理部	教 授	二村 聡	2. 4. 1	
	病 理 学	准教授	濱田義浩 ^㉘	2. 4. 1	
	内分泌・糖尿病内科	准教授	田邊真紀人	2. 4. 1	
	整形外科	准教授	吉村一朗 ^㉙	2. 4. 1	
	手 術 部	准教授	重松研二 ^㉚	2. 4. 1	
	再生医療センター	准教授	吉松軍平	2. 4. 1	
	筑紫脳神経外科	准教授	新居浩平 ^㉛	2. 4. 1	
	内分泌・糖尿病内科学	講 師	高士祐一	2. 4. 1	
	整形外科	講 師	西尾 淳 ^㉜	2. 4. 1	
	整形外科	講 師	前山 彰 ^㉝	2. 4. 1	
	麻 醉 科 学	講 師	原賀勇壮 ^㉞	2. 4. 1	
	筑紫呼吸器内科	講 師	串間尚子	2. 4. 1	
	筑紫脳卒中センター	講 師	津川 潤	2. 4. 1	
	心臓・血管内科学	講師(4-7)	末松保憲	2. 4. 1	
	消化器内科学	講師(4-7)	石橋英樹 ^㉟	2. 4. 1	
	整形外科	講師(4-7)	田中祥継 ^㊱	2. 4. 1	
	放射線医学	講師(4-7)	浦川博史 ^㊲	2. 4. 1	
	呼吸器内科	講師(4-7)	平野涼介	2. 4. 1	
	整形外科	講師(4-7)	木下浩一 ^㊳	2. 4. 1	
	脳神経外科	講師(4-7)	小林広昌 ^㊴	2. 4. 1	
脳神経外科	講師(4-7)	松本順太郎 ^㊵	2. 4. 1		
筑紫内視鏡部	講師(4-7)	宮岡正喜 ^㊶	2. 4. 1		

事務局より

同窓会事務室が学生控え室横の部屋へ今年3月移転し、以前の事務室より2倍ほど広くなりました。機能的なレイアウトを朔学長が考えて下さり白を基調とした清潔感溢れる部屋となりました。白に合うようにカーペットの色を高木会長が決められ風格ある事務局となりました。

皆様、是非お立ち寄り下さい。



編集後記

烏帽子会2020年春号をお届けします。この春はCOVID-19の影響により皆様にとっても、いつもと違った春だったと思います。しかし今だからこそできる地域への貢献をされている烏帽子会の先生の姿をいくつも目にすることができました。4月のある朝には民放の情報テレビ番組で本学出身の福岡大学病院救命救急センターの先生がCOVID-19重症肺炎の治療法の一つであるECMOの紹介をされていました。5月には烏帽子会よりの寄付金を活用して、福岡大学医学部と工学部が連携し、地域の医療機関へフェイスシールドを配布されていると報道がありました。医学部では授業のライブ配信やオンデマンドによる講義が始まり、医療機関ではオンライン診療が可能となり、新しいICTにも徐々に接することができるようになりました。烏帽子会の多くの先輩、後輩が実行されている「今できること」を確実にしながら、私も日々の生活、診療に邁進していきたいと思っています。

北島 研(21回生)



朔学長(左)に重田副会長から寄付金が贈与された



フェイスシールドの説明をする遠藤センター長



ものづくりセンターで製作中のフェイスシールド



医療現場への迅速な提供を進めている

福岡大学では、医療現場での深刻なフェースシールド不足に対応するため、4月より福岡大学ものづくりセンターにて製作を開始し、医療機関等に無償で配布しております。医学部と工学部が密に連携し、医療従事者をはじめ現場の声を逐一製作に活かし、日々進化させながらオリジナルのフェースシールドを製作しているところです。製作には、3Dプリンターやレーザー加工機を使うことで、量産できる環境がようやく整いつつあります。そこには、福岡大学医学部同窓会烏帽子会や一般社団法人福岡大学同窓会有信会からのご寄付が大変役に立ったところです。機材でできない作業や梱包・発送作業等は、この取り組みに共感してくれた教職員がボランティアで行っています。今後は、学生も参加予定です。

人類の歴史は、感染症との闘いの歴史であると言われていいます。ペスト、スペインかぜ、エボラ出血熱、SARS、MERS、そして、奈良時代に日本で大流行した天然痘。しかし我々は、その度に英知を結集し、人々が団結し、力を合わせて乗り越えてきました。今回の新型コロナウイルスとの闘いも苦難の連続ではありますが、必ずや乗り越えられるものと信じています。現在、世界中で専門家がワクチンや治療薬の研究・開発を進めています。そして、世界中の一人一人が、自分にできることを積み重ねていると思います。その一つが、今回の福岡大学からのフェースシールド提供でもあります。



福岡大学のスローガン「Rise with Us」

学生、教職員、卒業生、キャンパス、そして地域社会が一体となって運動・拍動し、開かれた自由闊達な議論を通して共に成長・発展することで、大学の使命である、時代に即応しグローバルに貢献する教育・研究・医療の提供を目指します。「共にステップアップする」、というメッセージです。

烏帽子会会報第68号

発行日 令和2年5月30日
発行人 高木 忠博
編集人 小玉 正太

発行所 〒814-0180 福岡市城南区七隈7-45-1
福岡大学医学部同窓会
電話:092-865-6353(直通)
092-801-1011(代表) 内線[3032]
FAX:092-865-9484
E-mail:eboshi@eboshikai.jp / maileboshi@gmail.com

印刷所 ロータリー印刷株式会社
福岡市中央区港2-8-9
電話:092-711-7741
FAX:092-711-7901